

海外農業ニュース

No. 36

昭和47年11月20日発行
毎月 20日 発行

もくじ

インドネシアの農業機械化への提言 1

— 農業機械化研究所江崎春雄、

八木 茂両氏を囲んで —

タイの養蚕 19

日本植物防疫協会 青 木 清

インドネシアの稲作政策 35

アジア経済研究所 尾 村 敬 二

トピックス

韓国の農村を見て 55

アジア経済研究所 真 田 岩 助

資 料

フィジー諸島の発見、探査、その建国までの略史 59

財 団 山 田 宗 孝

財団法人 海外農業開発財団

インドネシアの農業機械化への提言

農業機械化研究所研究第二部長 江崎 春雄

同 研究員 八木 茂

(きゝ手) 財団顧問 鏑木 豪夫

(時) 昭和四十七年十一月六日

農林省補助事業の海外機械化実験調査を去る九月二日から一カ月農業機械化研究所江崎春雄部長を団長としてインドネシアで実施しました。

鏑木

江崎さん、八木さんには財団からインドネシアへ農業機械の調査に行っていたのですが、ご苦労さまでした。本日は江崎さん、八木さんから印象その他ご意見などお聞きしたいと思いますので宜しくお願いします。

江崎

私どもは財団のお世話によってインドネシアの農業機械化調査ということで一カ月間調査に行ってまいりました。財団はじめOTCAの皆様方、特にOTCAから派遣されている専門家の皆様に大変お世話になりました。本誌をかりてお礼申し上げます。ありがとうございました。

インドネシアでの印象などということですが、私どもは九月二日から九月三〇日まで、ジャワとバリ島だけを、しかもOTCAのプロジェクト地区を重点的に見ただけでしかないことをお断わりしておきたいと思えます。

九月という時期は、ちょうど雨季前で、畑ではトウモロコシの播種準備、水田は休閑か収穫直後というのが多いようです。勿論いつ

でも稲作が行なえるところですから、いろいろなステージのものを
見ることができました。

鎬木 まず最初にジャワ島、バリ島の機械化の現状からおうかがい
したいと思うのですが、どうですか。機械化の現状といってもなん
ですから……インドネシアに入っている外国の農業機械の種類だ
とか、利用状況などということからおうかがいしましょう。

江崎 インドネシアの農業は農民農業と農園農業とからなりますが、
……私どもは農民農業を主として見せてもらい、エステート農業
というのは非常にわずかなところを見たにすぎないのです。農園農
業は面積からいっても統計数字が示すように、農民農業とくらべれ
ばごくわずかです（注、一）。

日本を含めて外国の農業機械が使われているのは現時点ではエス
テートです。あと農民の手をちよつと離れますと、もみすり精米所
で盛んに外国の農業機械が使われています。農業の機械化という点
から、個々に見ていくと非常におもしろい点もありますから、どう
いう作業があり、どんな機械が使われているかをお話ししましょう。
耕うんから収穫前までを八木さんに、収穫後を私が話しをしたらと
思います。

鎬木 そうですね。では八木さんひとつお願いします。収穫までを
作業の順を追って、見てこられたことを話して下さい。

（注、一） 農民耕地 一、二八八万ヘクタール

農園面積 一五九万ヘクタール

八木 一番最初に前提となります土とか、品種とか肥培管理とか、

水利の問題とかがどうしても関係してきますから、それについて簡単に説明したいと思います。

ジャワ島の土は、一般に日本と同じで火山が多いので、火山灰性の土が非常に多く、わりと新らしい土で、私達が見て回ったところは、粘土質のものもありますし、植壊的なところもありますし、砂がかゝたところもありますし……いろいろな土がありました。粘土質の土では乾季に乾燥して非常に固くなり、耕うん機では起し得ないような土もあります。そういう固い土ばかりではなく、日本の耕うん機でも起せる、ひじょうに軟かい耕うんに適した土もあります。

ここで耕うんのことを話しておきます。耕うんは人力や畜力によって行なわれています。耕うん機の普及台数は八〇〇台ぐらいと言われています。水田では、非常に固いところもあるものですから、水を入れた状態で……

鋤木 水ずきですな。

八木 その水ずきが行なわれています。水を入れた状態で耕起しているのを非常によく見ました。条件のいいところでは水を入れずにそのまま畜力で起すこともあり、それも見る事ができました。

鋤木 耕うん機はまだわずかで、一般に車に乗って道を走っていても見ることはできないんですよ。そしてジャワの農民は人力や畜力で耕うんすると考えていいわけですね。

八木 そうです。入っている耕うん機といえば、日本の援助で入ったもので、デモンストレーションファームとか……プロジェクト内には見ることができませんが、そのほかにはほとんど見る事ができません。それでやはり人間が起しているとか畜力で起しているの

八木 まだそこまではいっていませんね。

鋤木 あるいは、華僑系の人がトラクターを所有していて賃耕を専門に業者としてやるようなこともないんですか。

八木 ないんです。

鋤木 まだそういう段階までトラクターが普及していないんですね。タイとかマレーシアは賃耕業がかなり発達しているんですが、インドネシアはまだそこまではないんですね。小型トラクターは……。

江崎 プロジェクトで相当台数持っていて、模範農場のようなものをつくって、そこに貸し付けて、その農民がその小型トラクターを使って耕うんをするという形態をつくりつつあるのですね。

田植、除草、防除

鋤木 次は田植作業になりますが……。苗は大きいんですか。

八木 田植作業はほとんど手作業です。苗は意外と小さなものが植えられてましたね。もっと大きいかと思っただんですが。

鋤木 乱雑植えですか、それとも正条植えですか。

八木 ほとんど正条植えですね。……乱雑植も一ノ二カ所見ましたが、あとは正条植えでした。正条植えには田植定規と田植え縄が使われています。それに田植はほとんど女の人によって行なわれています。男は苗はこび、苗くばりをするくらいです。

鋤木 田植が終わったあとは収穫までなにもやらないのですか。

八木 田草とりがやられています。

鋤木 それは何も道具を使わないのですか。

江崎 八反どりのようなもの……。

八木 ジャワ島ではだいたい手どりですが、一部八反どりのようなものを使っています。バリ島ではよく使われているようでした。

鎬不 除草というのは、一作期間に何回ぐらいやるんですかね。

八木 二回から五回と言っていましたね。

鎬不 そうすると除草のあとはすぐ収穫ですか。

江崎 いやその前に防除があるんですよ。

八木 そうです……。防除器も作っています。同うで農具の生産工場を見たんですが、人力式の背負型噴霧器を作っていました。

鎬木 それは自動噴霧器ですか。

八木 自動噴霧機ですね。はじめに圧力を加えて……。これが二万三千台ほど普及していますね。これだけが広いインドネシア全域ですから、ごくわずかのところでしか防除作業は行なわれていないと考えられます。

収穫作業

鎬不 いよいよ収穫作業ですね。……収穫作業は、例の有名なアニアニですか。

江崎 ええそうですね。収穫のほとんどはアニアニなんですけれども……。在来のはヘクトール当たり一・五トン、二・〇トンなんです、それが例のグリーンレボリューションですか、緑の革命を契機として、新しい品種がどんどん作られ……。普及させようとしていますね。それらの稲は増産型の稲で短稈多収で穂数型でありますので、アニアニでやるのには非常に労力をよけにくうし、

腰をまげなければならないし、いっそこしをまげるなら鎌刈りの方がよいということらしいです。

そういうようなことで鎌刈りも相当普及してきている。現在はちようにと転換期であると思います。ただ新品種が食味の点でインドネシアの人々にあわないんですね。それで価格は在来種より三割安いんで、今後どれだけこれが普及するかはまだわからないんじゃないですか。しかし収量が非常に高く、良くとれるところではヘクター当たり7トンにもなるものですから、政府はこの普及に非常に力を入れているのです。それで……農民はやむを得ずアニアニから鎌刈りにかわってくるというのじゃないですかね。

収獲がすぎますと脱穀なんですけれど……。全般的にはアニアニによる収獲なものですから、つみ取った穂を足踏み脱穀するか、……足踏み脱穀機ではありません、足で踏んで脱穀するのですが、それかトンボづきといいますか棒について脱穀するのです。これがアニアニのものですね。

それに鎌刈りしたものは、すなわち株元から刈ったものはたたき台の上でたたいて脱穀するんです。

鍋木 穀打台というやつですな。

江崎 ええ。穀打台の上でたたくのですね。ですから昔私どもが古い教科書で見たと同じようなものが見れるわけです。

このようにして収穀したもののうち自家消費米以外のもの、自家消費米もそうですが、その大部分は精米所で脱穀精米されるんです。

精米と精米所

鎚木

ライスミルもしくはライスハラーですな。

江崎

ええ。……いままでの教科書ではそういうふうなのですけど、新しい調査結果ですとか向うで聞きますとライスミル、ライスハラーの区分はあんまりありません。ほとんどライスミル、小さいやつもライスミルと呼んでいます。インドネシアの統計なんかを見ましてもこの頃はライスミルと書いてあります。

鎚木

小規模の精米所もみんな入っているわけですな。

江崎

ええ入っています。精米所が全体でいくつあるかと言いますと……一万四千カ所ぐらいあります（注二）

（注 二） 在来の小精米所 二、五二三 日本式小精米所四七二

エンゲルベルグ形精米所 一、〇一三

鎚木

インドネシア全部ですか。

江崎

ええ。しかしほとんどジャワ島に集中しています。それで……そのうちの八割くらい、ですから一万一千ぐらいがだいたいエンゲルベルグタイプの機械が入っています。その機械の碎米率は、大碎米も入れますと悪いものは五〇%になるものですから、非常に悪いのですね。まあ二五・五〇%といわれています。これが日本製のもみすり精米機と代わりつつあるんです。

鎚木

ゴムロール式の……。

江崎

ええ、ゴムロール式のもみすり機と、精米のほうは研削式が少しは入っていますがほとんどはエンゲルベルグ形式です。

それで現在日本式の精米機が五百カ所くらいに入っています。

鎚木

それは研削式ですね。

江崎 いや、もみすり、精米機一緒に入れまして五〇〇カ所というところで。ゴムロールのもみすりきと、ケンサク式かまたはエンベルゲルグ方式の精米機ですね。まだ五〇〇カ所でほんのわずかなんですが、非常な勢いでこれに代わりつつあるんです。

鐺木 どの方式ですか。

江崎 ええ……日本の方式に代わりつつあるんです。これはもみすり時点における碎米率が非常に少ない。碎米率は一〇％程度低くなるのではないですか。

自家用の米も、精米所にもって行って精米してもらっているのを見ることができました。いずれは農家の自家用米も精米所で精米するようになるんじゃないですかね。

鐺木 もみが農家の手を離れるのはどの時点ですか。

江崎 二つありましてね……二つあるのか三つあるのか詳しくはわかりませんが。一つは刈りとってすぐに農家の手を離れることです。

鐺木 そこで代金の決算が行われるんですね。

江崎 そうです。刈りとったら、そこには仲買人が既にいまして、その場で買っていくわけです。これが一つですね。もう一つは農家が脱穀して、それを仲買人が買っていくということです。この二つだろうと思います。

鐺木 いずれにしてもライスマイルに入ったときはもう農民の手を離れているわけですね。そう考えていいわけですね。

江崎 大部分がそうです。しかし農民が自家消費米も精米所にもって行って精米するという形式ができています。自分のところで手づきしないようになってきたというわけです。バリ島などで多くな

ってきている様です。

鍋本

でも自家消費米は手づきが多いんでしょ。

江崎

ええ一番多いと言っています。

ライスマイルにはそういうわけでストークパディ（穂つき稻）が入ってくるわけで、それを脱穀するんですが……、この脱穀機にはいろいろな形式のものが入っていました。ただ問題は日本のものはちよっと耐久性がなかった、それにストークパディを脱穀するのに合っていなかったという点でした。それまでもなんとかいじくって直して使っているようでしたが、だいたいはスレッシャーが使われています。

鍋本

精米の等級はどういうふうになっているんですか。

江崎

はつきりした等級が決められていますので、はつきりした等級をつくった方がよいというサジェスションが調査などから出されています。現在のところ政府が公務員とか軍人などに米を現物配給するために買入れている米、またストックのために買入れている米については碎米率だけを規定しています。それで碎米率は三五％と規定されています。しかし七月半頃までは二五％だったそうです。今年ちよっと米の生産が落ちたもので、また三五％にしたそうです。

鍋本

大きな精米所などでは格付の規準をもっていて、もみをもってきたときに等級を決めるようなことはしないのですか。

江崎

米は統制ではなくて、自由取引ですから、大きな精米所も買うときは品質を見ていくらと決めているようです。統制のなかった時代の日本と同じではないですか。

鍋本

もみを試験的に精米してから値段を決めるといふようなこと

はないですか。

江崎 ええ、ないようですね。まったく感だけでやっているようです。ストークパディを見て、これは何々の品種だから何ルピアというようにやっているようです。

インドネシアの収穫時期はインドネシア全体をなべてみますと、五・六月にピークはありますが一年中収穫されていますから、いつでも脱穀精米をやっています。機械は年がら年中動いているわけです。

鎗木 そうですと、ライスマルの稼働率は非常に高いわけですね。

江崎 ええ非常に高いようです。……それとライスマルが買入れる価格がもみで一キロ二〇ルピアぐらいで、これが精米されると一キロ三五ルピアから五〇ルピアで、精米所というのはわりあい資金が潤たくなっているのですか。

鎗木 その……ライスマルの経営者というのは華僑系の人ですか。かならずしもそうではないのですか。

江崎 私どもが会った限りでは華僑系でした。

八木 華僑はだいたい八・九割になるそうです。クラワンあたりですと、所得の多い順に十人数えてみると、精米所の経営者が七・八人入っているということです。

農機具の生産

鎗木 だいたい利用状況はわかりましたので、次は農機具の生産についてお聞きしたいのですが……。在来農機もあるわけでしょうが、そういうのはどこかで作っていますか。

八木 くわなんかはインドネシアで作っているのもありますし、中共から入ってくるのもあります。くわぐらいはインドネシアの農機具工場で作っています。あとはかまなどは……。

江崎 鎌などは野かじで作っています。

鎗不 在米農法で言えばくわとかまですむんですか……あとすきですな。

在米農機具でない、なんといいますか新らしく登場した”近代的”
とでもいう農機具の生産はどうなっていますか。

江崎 そうですね、日本で言えば昭和初期の状態の機械が作られています。精米機とか……、自動噴霧器、噴霧器、脱穀機（スレッシャ）、もみすり機（フラッシュヤー型とロール型）、その他砂糖キビのしぼり機、コーンシェラーなどが作られています。

鎗不 それらの需要供給はバランスがとれているんですか。

江崎 それは……。ある工場に行ってみると注文生産ですね。ある工場では見込み生産をやっています。売ることを一生懸命やっている工場では見込み生産でほとんど作っています。殿球商売で必要になれば買いにくるだろうというのもあります。兵器廠などは殿球商売をやっています。

鎗不 兵器廠で農機具をつくっているんですか。

江崎 ええつくっています。生産能力も相当あるようです。工作機械も結構いいものが入っています。

鎗不 兵器廠は軍のものでしょうか、それらの工場の経営はどのようになっているんですか。

江崎 株式にはなっていないようで、個人会社ですね。経営者は華

僑なんですけれども、国の政策があるんですかね、労働者はインドネシア人を多く使っていました。

鎚木 規模はどれくらいなんですか。例えば工員数で言えば。

江崎 大きいところで三百名、ちよっとしたところで百名というところですよ。

修理補修

鎚木 インドネシア産の農機具の部品の補給とかアフターケアはどのようにやっているんですかね。

江崎 それは二つあるようです。一つは販売店を通して修理サービスをすること、もう一つは国が修理サービスをやっています。

鎚木 さきほどのトラクターセンターなどですか。

江崎 ええ、そういうようなものがジャワ島に三カ所あります。ここでは修理工の訓練もやっています。年間四〇人といっていましたね。

ディーラーの方は非常に真剣になってアフターケアをやっています。

鎚木 アフターサービスのための部品とか、修理のための施設、ボール盤とか施盤などどのような状況ですか。

江崎 部品ぐらいいはあるようですが、その他のものは販売店では持っていないようです。ただしですね。インドネシアには自動車が多く普及していて、ボンコツもたくさんあります。これはドライバートかなづちとモンキーだけで、インドネシア人が自分ではほとんど修理してしまいます。インドネシア人は手先が非常に器用なんだと

思います。

鍋木 自動車の修理工場はないんですか。

八木 あまりみなかったです。ほとんど自分で修理しちゃうんですよね。

鍋木 機械の価格などはどうですか。農家経済からみて機械を買う余裕がありますか。

機械化の可能性

江崎 そうですね。機械化の可能性ということになりますから、難しい問題ですね。……考え方としては二つあるんじゃないですか。まず機械化が始まるのは、機械が売れていくのは一万五千カ所ある精米所からではないですか。精米所はそれだけの投資をする余裕があると思います。

鍋木 精米所といえば、もみすり、脱穀精米機だけではないですか。
江崎 それでね、それが自分のところで精米する米を確保するため

に機械を導入していただくということです。

鍋木 農家が生産に使う機械をライスマルが買い、それを貸すか。
江崎 貸すか賃耕するかでしょうが、こういう可能性が十分あるんじゃないですか。

もう一つは政府ベースによって導入されるものですね。政府ベースでモデル農場に機械を入れていって機械を進めていくということです。

鍋木 モデル農場に入れるだけで普及する可能性はあるんですか。
江崎 その可能性があるかどうか……判りませんわ。

鍋木 機械が導入されるとすれば、ライスマルを通じてか政府ベースによるかではないかというのですが、農家自らが再生産のために機械を導入するということは考えられませんか。

江崎 そうですね……向うへ行つて驚きましたことは銀行利子が高いんですね。貯金をしますと、普通の銀行でも一割五分から二割の利子なんです。ということは金を預ける人が非常に少ないということです。農家の人は貯金をするより金銀を買うんですね、だから農家自らが再生産用の機械を買つて、生産性を高めるというところまできてないんじゃないですか。

鍋木 そうすると今後日本の農機具を輸出しようと思えば、華僑系のライスマルか政府ベースが相手ということになりますかね。

江崎 そうですね。ライスマルと政府ベースそれにエステートの三つではないですか。

鍋木 いずれもワンクッションがあつて、農家へ直接というのは困難なんですね。

江崎 そんな感じがしますね。……それにもう一つ、エンジンを農機具の中に入れるとすれば、電力事情の悪いところですから、定置作業用の機械は全てエンジンで動かしていますから、ディーゼルエンジンの生産というのは伸びるんじゃないですかね。

鍋木 エンジンはジャワ島で生産されているんですか。

江崎 生産が開始されたですね。ディーゼルエンジンの生産が合併ですけれどもじまりますね。これらは、農業としてはライスマルの動力源として使われるんでしょうね。

不 ディーゼルエンジンで……発電するんですか。

江崎 直接駆動です。

八木 それからヴェルト掛でもみすり機や精米機を動かしています。

機械化のための問題点と考え方

鎗木 農業機械ばかりでなく、なんでもそうでしょうが、機械化はその国の基礎工業がしっかりしていなければなかなか自国で生産するということが難かしんですが、その点はいかがですか。

江崎 インドネシアの工業力も年々向上していると見たほうがいいんでないでしょうか。いろんな文献その他で見えていくと、ほとんど工業力がないとなっていますが、今度行ってみてインドネシアも工業力がついてきたと感じました。そして非常な勢いで伸びてきています。数年後には大多数のものを自国で作れるようになるだろうと思います。

しかし問題点もあるんじゃないですかね。自分の国に適したものを作するための研究体制がないんですね。こんな点が大きなネックになるんじゃないですか。ただ工作機械とか普通の機械工業ですと、どこへ持っていくてもそのまま通用するんですが、農業機械だけはそのままではなかなか通用しないので、この点の研究不足というところがなかなか機械化の進まない一つの原因ではないですかね。

八木 それから日本の機械を輸出するにあたって、向うに研究体制がないだけにこちらで十分現地の事情を調べてから輸出することが大切じゃないですか。いつでも言われることですが。

鎗木 日本からの農機具の輸出というのは……これから増えるんですかね。

江崎

そうですね……。脱穀機なんかですと、一日二トン程度で非常に少ないんですが、これが三六五日毎日動いているんですね。日本の脱穀機というのは一年間に一町歩で十年もって十町歩です。十町歩ぐらいがだいたい限度なんです。日本では。しかしこれですとインドネシアではおおよそ二十日もやっていればこわれてしまうということですよ。

私も、あるライスマルでまだ買ったばかりの自動脱穀機が一カ月程でこわれてしまった、いや磨耗してしまったのを見ましたけれど。こわれるのではなくて磨耗しちゃうんですよ。

インドネシアではどれだけ耐久性があるかということが大問題なんです。二、三十万する機械が一カ月やそこらで磨耗して使えなくなってしまうとすれば、日本でも問題になりますよね。まあこんなような問題がありますよね。

耕うん機はもっとシンプルに作らなければならないとか、強くするところは強くしなければいけないとか。トレーラーにしても道が悪くてゴトゴトだから補強するところは補強しなければならぬし、……まあ耐久性が一番問題になるんじゃないですか。

精米機ですと昔から耐久性のあるものが作られています。ただ日本の場合、非常に精度の高いものがあるんですが、インドネシアでは碎米率二五％ぐらいで十分ですから、それぐらいの精米機を作ってもっていいのです。あまり精度の高いものは直段が高くて売れないということになります。

したがって各機種とも、その国の国情に合った機械を輸出しなければだめだということです。日本に合ったものを持っていっても、これは見込みがないのではなからうかと思うのですがね。

鍋本

そうすると、相手国の実情に合せた農業機械を作らないかぎり、日本の農業機械の輸出はないと考えていいわけですね。

江崎

ええ、そうですね、それには研究が先行しなければだめですね。

鍋本

日本の農業機械をそのまま持って行くのではなく、向うの事情に合うように改良して、更らには新らたに向うむけのものを開発することが必要なわけですね。そうしないと日本の農業機械全体の評判を落してしまいますな。

江崎

そういった研究体制の確立を政府ベースでやらなければだめですね。

鍋本

そうですね。日本における開発途上国向け農機具の開発研究体制それに開発途上国における研究体制、この確立が今後の大きな課題になるでしょうな。……いや本日はお忙しいところをどうもありがとうございました。

(文責 編集部)

タイの養蚕

日本植物防疫協会 青木 清

(ききて) 財 団 田 中 正 一

(注) 青木さんは元農林省蚕糸試験場病理部長で、四四年九月から三カ年間タイの養蚕開発のためOTCAから派遣された養蚕専門家です。十一月一日財団で、青木さんを囲んで、タイの養蚕についていろいろ聞かせてもらいました。そのときのものです。

(敬称略)

タイ養蚕の問題点

中田 タイのばあい蚕では微粒子病だとか、寄生ハエだとか、桑の方では根腐病などが養蚕にとって大きな問題なのです。

青木 タイの養蚕全体をみますと、第一の問題は蚕の品種が悪いということは、まず糸の量が少ないということです。しかし単に糸の量が少なくても病気にさえならなければ一応は我慢できるのですが、病気がひじょうに多く、折角飼った蚕から繭がとれない場合がしばしばで、これが第二の問題です。しかも第一の問題と第二の問題は互に関連しているのです。

中田 病気といいますと……

青木 蚕については、微粒子病がいちばん多いのです。それからハエ——寄生バエですね。その他硬化病、これは体が硬くなる病気でガビによるものです。それに、体が軟化して腐る軟化病というのがあります。さきほど申しましたように、糸の量が少なくても病気さえなければ生

糸の生産量はうんと増えるのですが、いろいろな病気でだいぶ減収しているのです。それをタイの古くからの養蚕家はあまり気にもしないのです。

中田 病気を気にしないのですか。

多化性蚕を二化性蚕へ

青木 日本だと飼っている蚕の半分ぐらいも病気になるかと全部捨ててしまうのですよ、労力と収益関係が合いませんからね。ところが彼らは十頭でも二十頭でも生き残りがあれば最後まで飼うのです。そしてそれから自分で蚕種を採っています。

タイの蚕は多化性といって、一年中いつでも卵がふ化してしまうのです。ですから養蚕家は後から後からひきつづいて飼っているのです。

中田 休眠期間はないのですか。

青木 ええ、ないのです。蚕卵はいつでもふ化しますから、養蚕家はつぎつぎとひっきりなしに蚕を飼っているのです。しかも、一軒の養蚕家に、一令蚕もあれば、三令蚕もあるというふうにごっちゃに飼っているのです。

中田 休むときはないのですか。

青木 そうなんです。休みがないから、病気をなお一層ひどくしているのです。微粒子病でいいますと、多化性蚕を四季を通して連続飼育し、しかも病気の蚕から自分で卵をとって、有毒か無毒か検査もしないで、それを蚕種に使うので被害は跡を絶たないのです。

蚕の品種が悪くて糸が少ないこと、病気が多いこと（とくに微粒子病が多い）の次ぎは、桑の栽培管理が悪いということです。植えたものは植えっぱなしなのです。年中蚕がありますから、桑も年中なければ

ばならないので、伐採をしないのです。伐採をすればいい葉がとれるのですが。現在のところ小さな貧弱な葉を労力をかけて年中摘んでいるのです。しかもそれに各種の病虫害が発生しています。・・・

中田 だいたい何回ぐらい飼えるんですかね。

青木 何回・・・ 養蚕家によつては途中で休んで、次にまた近所から蚕種をもらつてはじめる人もいますし、一年中ふ化しますから、回数は養蚕農家によつて本当にまちまちですね。

中田 そうですか。

青木 タイの養蚕の一番の課題は現在の多化性蚕を二化性品種に切り替えることです。それは繭の糸量は勿論、前にもお話した蚕の病気の関係、さらに桑の収量とか桑園病虫害防除とも関連して大切なことです。

中田 私たち素人には多化性、二化性ということがよくわからないのですが。

青木 二化性蚕というのは、自然状態で一年に二回ふ化する性質の蚕です。しかし人工ふ化と申しまして、希薄な塩酸の中に蚕卵を浸漬して刺激を与えますと私共の希望どおり随時ふ化させて蚕を飼うことができます。日本では主にこの二化性蚕を飼っています。ところが多化性蚕は、越年することなく、一年中何回も世代をくり返す性質のもので、これは南方系の品種だけにみられます。

- 二化性蚕を使いますと、利点がいくつかあるのです。それは
- ① 一年中蚕飼いに追われることなしに、都合のよい時だけ養蚕することができる。

- ② 養蚕を休んでいる期間に、病虫害予防のための蚕室消毒や桑園消毒を行なうことができる。

中田 二化性蚕種をどのように利用するのですか。

青木 そうですね・・・二化性蚕種は、今申しましたように、薬品処理をしないとふ化しませんから、養蚕農家が各自勝手に気まぐれに蚕を掃き立てたり飼育することができなくなります。

現在タイ国での方針は次のとおりです。

養蚕研究訓練センターで育成された二化性優良品種の蚕種を四つのサブセンターなどで増殖し、それを養蚕農家に配布して、蚕を飼わせるように仕向ける―言い換えれば、現在養蚕農家が飼っている病毒の多い多化性蚕をやめさせるように仕向けてゆくことです。

微粒子病

青木 仮りに養蚕農家で飼う蚕が以上のようにしてすべて二化性蚕になったとすれば、微粒子病の根絶もでき、収繭量もあがりますし、また飼育回数も現在のように休みなしということでなしに、年間五回とか六回とか適宜決められますので、それに対応した桑の収穫法も決り、桑園の消毒も可能になるわけです。

特に微粒子病は、病母蛾から卵に移行して起る場合が多いものですから、四つのサブセンターなどで厳重な検査をした蚕種を配布することになれば、少なくとも病毒蚕種に因る被害は免れることになります。

中田 ということは、もう農家には採種をさせずに、採種は政府機関でやるということですね。

青木 ええ、そうです。

中田 そこで微粒子病を絶ってしまおうというわけですね。

青木 日本では蚕種会社が種を採って、それを養蚕農家に売っているのですが、微粒子病の検査はその会社がやっております。この検査は

法規の定めるところによつて行なわれています。会社の売った蚕に病気で出れば、会社の死活問題になりますから、会社も真剣なわけですね。種やの大きな仕事はこの微粒子検査、母蛾検査といいますがこれです。これをタイの場合はサブセンターなどにやらせようというのです。

中田 日本にも微粒子病はあるのですか。

青木 あります。日本ばかりでなしにヨーロッパにもあります。フランスでは一八五〇年頃からその後約十五年間にわたつてこの病気が猛威をふるい、同国の養蚕はつぶれかけたのです。時の女皇の命を受けたルイ・パスツールが献身的な努力研究によつて今日の防除法の基礎を確立したのです。

日本では母蛾検査や蚕室蚕具類の消毒などによつて微粒子病は少なくなりましたが、タイでは自家蚕種の関係から、この病気の分布が広く、いまのままでさらひろまるものと考えられます。なおこの病気は、母体伝染のほかに、蚕が病原を桑の葉っぱといっしょに食べると起るものですから、蚕室蚕具などをフォルマリン液で消毒することが必要です。ところがタイの養蚕農家の家屋構造はスキマだらけですから、消毒によつて病原を絶つことは容易ではありません。ですから共同飼育なども考えられるようになりました。一、三令を共同飼育し、四令から養蚕農家へ配ろうというのです。

こういうことになると、ちゃんとした無毒の蚕種をつくつて共同飼育所へ出すということが、いずれできるようになると思います。

中田 タイの養蚕行政は、養蚕家自身が蚕種を採ることをさげさせて、政府機関で採って配りますということですね。そういう方向に進み出しているのですね。

青木 そうです。日本側からもいろいろサジェスションを与えているのですが、行政上の問題もあり一気にはいかないようです。なお重ねて申し上げますが、二化性蚕種についてのこのような行政的処置は、微粒子病防除上必要なばかりでなしに、前に申しましたように、その他の蚕病―硬化病や軟化病防除の目的で行なう蚕室蚕具の消毒や各種病害防除を目的とする桑園消毒をやり易くするためにも同時に必要なことなのです。

寄生バエ

中田 それから寄生バエについてお聞きしたいのですが、これもかなりひどいのですね。

青木 日本にも寄生バエはいますが、タイのは日本のものところがいます。日本のものは、桑の葉に産卵し、蚕がその卵を桑の葉といっしょに食べて寄生を受けるのですが、産卵は春だけです。被害は年一回だけです。ところが、タイの寄生バエは、蚕の皮膚に直接卵を産みつけ、そこでふ化して蚕を侵すのですが、悪いことにこの寄生バエは多化性で年に何回もふ化します。寄生バエも多化性であり、蚕の方も現在のところ多化性であるため、被害の方も、日本の場合とちがって、年中連続的です。

中田 うまい防ぎ方がありますか。

青木 簡単に効果のある方法ができました。

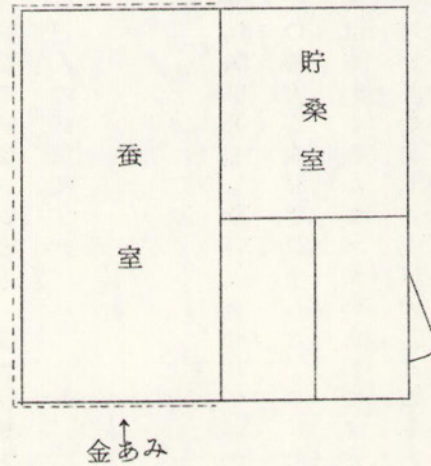
蚕室へハエが入らないようにすればよいのです。そのために蚕室の窓などの周囲に金網をはりめぐらすのです。図のようにすればよいのです。実際の養蚕農家では現在のところまだ金網を張ったものは少ないのでして、蚕座に布をかぶせることによって解決しています。給桑

したあと次の給桑まで蚕座に布をかぶせておくのですが、規模が小さく蚕座の数も少ないのでこんな方法もやれるのです。

中田 タイではたしか丸い竹箆を蚕座に使っていたようでしたが。

青木 そうです。蚕座の布被覆は、養蚕農家が昔から経験的にやっていることで、けっこう効果はあるのです。しかしこの方法は、私どもが見るかぎりでは、蚕の大量飼育には不向きであり、さらにこの国の高温な環境では、通風その他の点で蚕の生理にとって必ずしもよいとは考えられず、現に軟化病誘発の原因の一つともなっています。

図説明



蚕室に外部への入口を直接つけるのではなく間接的に外部へ出られるようにする。寄生バエは、蚕室の囲わりにだけあつまり（香にあつまると言われる）、蚕室から離れた図中の入口には寄生バエはこない。

中田 それで寄生バエにやられると蚕はどうなりますか。

青木 寄生バエは一令、の小さい蚕にはあんまりつかないのです。三令以後の蚕に好んで産卵します。皮ふに産卵してから二日ぐらいでふ化し皮膚を破って蚕体に入ります。そして幼虫は約一週にわたって蚕の体の中で生活するわけです。この間に蚕は死んでしまいますが：

中田 ああ、死んでしまいますか。

青木 それからウジが蚕の皮を破って体外へ出てきて、土の中にもぐって蛹になります。蛹の期間は十一ないし十三日間です。そしてまたハエになります。卵からハエになるまでが十九と二三日であり、成虫期間が約二週間ですから、一年に少なくとも十回位は発生するわけです。

中田 こわいですね。

青木 そうです。一卵でも生みつけられると蚕はたいがい死にますけれど、一頭の蚕に卵を二〇ケぐらい生むもあります。

中田 そうするとタイの蚕の病気というと、微粒子病と寄生バエと：
：：硬化病というのはどんな病気ですか。

硬化病

青木 従来タイでは硬化病は発生しないと言われていたのですが、調査の結果、しばしばその被害が確認されました。タイに赴任する前私もタイには硬化病はないときかされていたのですが：：。

硬化病というのはいろいろなカビが病気の元になるのですが、硬化病と総称されるものの中には十種ぐらいの病気があります。この病気で死んだ蚕は日本などでは体が硬くなってミイラ状になってしまうのです。日本ではその防ぎ方も簡単です。皮ふから入るものですから、蚕を飼っているときに蚕体蚕座に粉末の消毒剤をまくだけで簡単に防げるのです。

どうしてタイに硬化病がないと言われていたかというと、日本では硬くなるのですぐ判るのですが、タイでは斃屍が腐爛し、硬化病菌の発育が阻止される場合が多いため、硬くならないのです。どうして腐

ってしまいかというと、温度が高いからです。硬化病菌の発育の適温は二三度〜二七度ぐらいなのです。そしてもともとは硬化病菌で死んだ蚕であっても、ヘイ死とともに蚕の腸内にいる高温を好む細菌が急に繁殖して硬化病菌を抑えてしまうからです。

こうした硬化病蚕が、従来軟化病とか微粒子病として誤認されてきたわけです。

中田 そうですか。この防除はまだやられていないんですね。

青木 今までタイでは硬化病についての認識がなかった関係からまだやられていません。しかし蚕体蚕座を消毒すれば簡単に防げますし、また現在のタイの養蚕農家の構造のままでも日本の技術をそのまま当てはめられます。日本ではセレサン石灰（五％）やパフソール、カビノランなどが使われています。セレサン石灰はイモチ病その他の病害防除にも広く使われた消毒剤ですが、水銀剤であるため、環境汚染ということから一般の使用は禁ぜられ、種子消毒とか硬化病などに限って使用されています。パフソールは結晶フォルマリン剤です。カビノランは各種硬化病予防に効果がありますが、タイで特に多い麴カビ病――硬化病の一種――の防除には特に早効ありと言われています。

このような消毒剤を使つて蚕体蚕座の消毒をやり、一方では蚕室蚕具消毒の励行によつてタイの硬化病は防げる筈です。

軟化病

中田 軟化病はどんな具合ですか。

青木 蚕の軟化病にはいろいろの種類がありますが、大きく分けて、ウイルスによるもの、細菌によるもの、そして生理的に起るものの三つになります。ウイルスや細菌によるものは、蚕の掃立て前に蚕室蚕

具類をフォルマリン液で消毒して病原を殺せば比較的容易に予防できるのですが、現在のタイの養蚕農家の家屋構造では少し無理です。共同飼育所でもできればやりやすいのですが……。生理的軟化病というのは、蚕が異常な環境——例えば極端な高温とか食桑不足とか——で飼育されたような場合に、体が弱って起るものです。なお先に申しましたウィルス性軟化病も細菌性軟化病も異常環境のもとでは一層起りやすいものです。

寄生バエを防ぐために、養蚕農家では蚕座に布をかぶせると申し上げましたが、このやり方は軟化病を誘発しやすいので、蚕室に金網を張ることは軟化病予防の点からみても望ましいのです。

中田 蚕の病気についてだいぶ勉強させてもらいましたが、桑の病気はどうですか。

青木 桑の病気や害虫も多いのです。日本にあるものもありますし、タイ特有のものもあります。一番被害の大きいのは根腐病です。

根腐病

中田 根腐病は日本で言う紫紋羽病ですか。

青木 いや全然ちがう病気でして、日本にはありません。タイでは桑の植付畑に直接挿木する方法で行なっているのですが、挿木後三〜六カ月頃から挿木下部切断面付近から根腐れが始まり、これが遂次地際部および根におよんで枯死するものが多いのです。

中田 苗木をどこか別なところで仕立てればどんなものですか。

青木 そうなんです。直接挿木の代りに、もみがらでつくった苗床に挿木して発根させ、それを植えた結果、被害程度ははるかに少なかったのです。ただしこの方法でやるには、乾季は都合悪いのです。活着

率が悪くなりますから。雨季栽植が望ましいのです。

病気の原因なのですが、罹病株から微生物の分離などもやり、それらの分離菌を桑に接種するといくつかの種類の分離菌で病気がでるのです。しかしその病徴がかならずしも自然の病気と同一ではないのです。自然のものですとベトベトに腐ってくるのですが、接種試験の場合はベトベトになったり、乾いた状態で枯れていくのもあるんです。

というわけで私が帰国するまでに、これだという確実な病原をつかむことができなかったのです。どうもほかの、私がまだ分離していない第二、第三の微生物も関係しているらしいのです。

中田 根腐病のほかにかわい病気がありますか。

裏うどんこ病

青木 ええ、いろいろの種類があるのですが、今のところでは、日本にもある裏うどんこ病の被害が目立ちます。これは葉の病気ですが、この被害が大きいのです。葉の裏側に粉をまぶしたように菌が繁殖するのです。この葉を蚕が食べたがらないのです。これが発生すると、蚕を途中で飼えなくなるほどです。

この病気は日本では簡単に防げるのです。冬季に枝条を消毒すればよいのです。タイでは桑が年中ありますから、この菌も年中でているのです。蚕も年中飼っていますから、消毒しようとしても、蚕への被害の関係から、その時期がないのです。この辺からみても、蚕の飼育回数を年間何回位と決め、桑の方もそれに対応させてゆくことが必要なのです。

タイ養蚕の振興のために

青木 以上申しましたように……、蚕の病気の点からみても、桑の病虫害の点からみても、タイの蚕が多化性であるということが非常なガンになっているのです。二化性にして年に五、六回の飼育回数にすれば病気を防ぐことが簡単になるのですが。

中田 それでも五、六回飼えるのですか。

青木 日本でも四回位は飼っています。

二化性蚕を使って蚕の病気も防ぎ、桑の病虫害をなくすることができれば、まゆの質なり、収けん量が日本のようによくなってもさし当りいいと思うのです。日本よりレベルの低い品種でも病気がなくなりさえすれば、ずうっと増産できるのです。

中田 タイの養蚕について、病気のことからずうっと聞いてきたんですが、日本の養蚕と熱帯の養蚕は非常にちがうようですがそうなんですか。

青木 養蚕自体がちがうというよりも、養蚕を行なう環境というか条件というか、それがいろいろとちがいます。蚕の病気はほとんど日本と同じものです。しかしタイの現在の養蚕のやり方で病気が防げるのは硬化病だけです。その他の病気は日本のように年に何回というふうな飼育回数にしないと防げないのです。それにはいまの蚕の品種ではだめです。品種をかえる必要があるのです。というのは、蚕室や桑を消毒する期間が必要なのです。また微粒子病のように母体伝染するものでは養蚕家が自家採種をしないようにしなければなりません。

中田 その他何か。

青木 それからタイには製糸業が発達していません。いまは養蚕家が自家産の繭から自分で糸を引っぱり出しているのです。古くからの養蚕家は、少しでも金をもうけて生活水準をあげようという意欲が

少ないようにみられます。製糸業というものがなく、できた繭の決った買手もなかったのですから無理もないということです。

中田 タイに養蚕業を成り立たせるためには製糸業が必要になつてくるわけですね。

青木 これは絶対に必要だと思います。私が家を借りていた家主は中国系の人でしたけれども、十町歩ぐらい桑を最近植え、蚕室も建てて蚕を飼っているのです。こういう人達の意欲はたいしたものなんです。ね。そしてほかにもどんどんこういう人達ができています。この人達に蚕品種の問題とか、消毒の問題などを指導しています。しかし残念なことに彼らがつくるマユの確かな買い手が今のところ全くないのです。

中田 はあ……製糸業がないわけですね。

青木 ですから製糸業ができてきて契約栽培・契約飼育のようなことにすればタイの養蚕は振興すると思うのですが。

中田 結局民間の企業が投資するということですね。日本が援助するとすれば合併で製糸業を育てるということですね。

青木 タイで将来製糸業が成り立つかどうか。その調査が必要でしょうが、これについては目下タイの間でいろいろ検討されています。

質疑応答

中田 これはポリシーの問題になると思いますが、東南アジアにはタイのほかにも養蚕国がありますが、その人達の技術訓練は日本でやるよりもタイの養蚕センターでやった方がよいということを知っています。……、私も同感なんです、それらについてなにかご意見は……。

青木

私なんかそう思います。前にも申しましたように、日本とはちがった環境条件の下における養蚕技術の研修は現地ないしそれに似た土地で行なう方が効果的でしょう。それだけでなく、日本から熱帯地域の養蚕振興の目的で派遣される専門家などもタイのセンターで少なくとも半年位は体験してから行くのがいいと思うのですが。

タイ以外の国の人の研修ですが、現に既にラオス人の研修生を受けいれていますし、タイ政府でも、この外国人の技術研修については異存がないようです。

中田

話がいろいろになりますが、タイとしては養蚕振興のネライをタイシルク原料の自給に依っているのですか。タイシルクは今外国から原料を入れているんでしょうね。

青木

ええ、現在のタイシルクは、横糸には農家から買ったものを使っているわけですが……。

中田

横糸はタイの……

青木

そうです。非常に太さのマチマチなものです。それから縦糸には朝鮮その他から輸入した糸を使っているわけです。輸入生糸は高くなるものですから、安いタイシルクには縦糸をあまり使わないのですよ。横糸はちゃんとしています。縦糸はすばらしいものがあります。高いものは別ですがね。それから農家が自分のところで織っているのは純タイ産の生糸です。

タイシルクは内需用も増え、観光客も買って行きますし輸出もありますから、養蚕を振興して縦糸までつくろうということ。輸入をせずにタイシルクを増産しようということです。

中田

そうするとタイ政府は養蚕振興に非常に意欲的なんですね。

青木

そうですね。非常な熱の入れようです。なぜかという、乾

季につくる適当な作物がないんですよ桑以外には。特に東北タイの乾季では桑以外になにもできないような状況です。桑は根が深いので乾季にも比較的平気なのです。

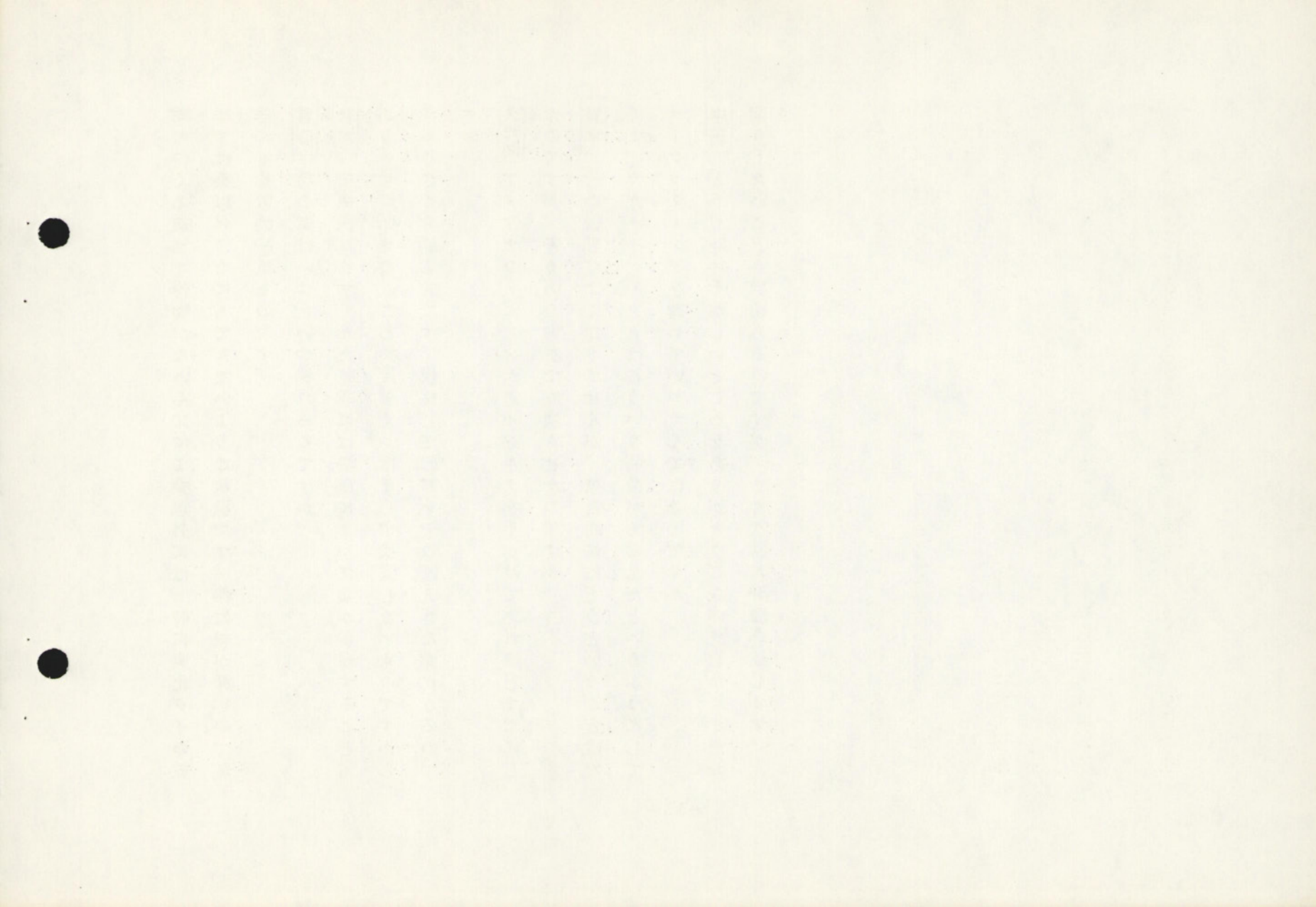
首藤 桑の葉はいついつ採れるのですか。

青木 年中採れます。ただ乾季には場所によつて葉が萎縮することもあります。いまのところ桑は植えっぱなしで伐採しないものですから葉も小さく非能率的です。伐採して肥料をやれば大きな葉になるのですが。

久津間 アメリカのトムソンがタイシルクを手がけてあれほどまでにしたのですが、どういう方法で成功させたのですか。

青木 その辺私はよく知りませんが、技術的にはどうということはないです、ただタイシルクとはこういう特徴があるんだというふうにしてマーケティングを進めていったんではないですか。

中田 どうもおいそがしいところをありがとうございました。まだお聞きしたいことが沢山あるのですが、また次回にお願い致します。



インドネシアの稲作政策

(ビジネスニュースから)

I、インドネシアの稲作増産制限政策(一九七二、一〇、三付)

アジア経済研究所 尾村 敬 二

インドネシアでは、米は主食糧として、従って食糧の最大のカロリー源として、経済的にも社会的にも重要な意味がある。その食糧に米の占める割合は約六〇%である。米の生産高は一九六八年の国内総生産(GDP)の一四%を占めている。また米の生産高は中国、インド、パキスタンについて世界第四位である。しかし国内需要は満たされておらず、独立以前の一九世紀中葉から米は輸入されており、一九六四、六七年を除くこの一五年間は世界最大の米の輸入国であった。五カ年計画実施以来のこの三年間、毎年の生産目標は達成されたにもかかわらず、食糧援助による米の輸入は年平均六〇万トンで、一九七〇年には九五万トンに達している。

人口増加による米の消費量増加を満たすために政府の各政策のなかでは、米増産には常に最優先度が与えられてきた。米増産は一九五一年から加速化され、年平均五%で増大した。収穫量は一九五一年の六二〇万トン(精米で)から一九七一年の一二七〇万トンに倍増した。五年計画実施後三年間の増産率は年平均七%である。

五年計画の順調な進展に対し、一九七三年には、生産過剰が懸念されている。このため、政府は米の生産目標を一五四〇万トンから一四八〇万トンに、引下げた。本年八月十六日の独立記念日における大統領演説は、次の三点に要約される。

一、消費量を上回る米の生産高は価格下落を伴うので、農民の所

得を引下げ、その結果五年計画の真の目的を達成できなくなる。

二、小麦など米以外の食物を使用した食生活の改善。

三、これに伴って、一四八〇万トンの生産目標で米の自給は達成できる。備蓄のためには、従来から供与されている先進国の食糧援助を活用するので輸入のために必要な外貨を準備する必要はない。

食糧構成と生産計画

一九七一年の米の生産高は一九六一年に比べて四五〇万トン多かった。しかし、インドネシアおよびジャワで年一人あたり平均2 kgの増産にすぎず、この増産は消費量をわずかに増加させたにすぎない外領では一人あたり二・五kgの増産である。もし一九六九／七一年に一人あたり年五kgの米の増収があったとしても輸入による米は単に消費量を増加させるだけであった。一九七一年の一人あたり米消費量は輸入米を含めて約一一二kgであった。一九六一年には九六kgであった。一九七三年の生産目標一四八〇万トンが達成されれば年一人あたり消費量はgrossで約一一九kg、netで一〇〇kgになる。一九六九／七一の援助による小麦輸入によって、年一人あたりの小麦消費量は約三・五kgになった。小麦を主食とする生活は都市生活者の一部にしか広まっていない。輸入小麦について都市生活者だけに限って考察すると、その消費量は一九六一年に一人あたり七kgであったのが、一九七一年には二〇kgに増大している。小麦はインドネシア人の主食として考えることはできないので、小麦の輸入の増減は、インドネシアの食糧構成の変化に影響しない。

インドネシア人の栄養摂取の質、カロリー量、タン白摂取は、東アジアおよび東南アジアの隣接諸国に比較すると劣る。一九七一年の一人あたり肉消費量は三・五kg、卵十一個、牛乳〇、五リットル

1人/1日				kg/年			
	カロリー	タン 白 質	脂 肪	米	ト－モ ロコシ	いも類	小 麦
1 スリランカ	2,219	50	47	106	1	38	22
2 インド	1,948	51	27	63	7	13	28
3 パキスタン	1,993	50	28	95	4	7	41
4 ビルマ	2,001	44	30	147	2	2	2
5 カンボジア	2,165	48	18	164	6	6	2
6 ラオス	2,005	45	14	171	6	7	1
7 タイ	2,326	51	27	161	-	26	1
8 西マレーシア	2,225	49	44	102	1	17	22
9 フィリピン	1,895	44	31	86	24	40	11
10 中 国	2,029	58	31	69	21	90	18
11 日 本	2,429	72	41	111	-	50	29
12 インドネシア	1,798	39	21	88	24	118	0.7

であり、消費タン白量は一カ月平均二・二グラムである。野菜および果物の生産は年一人あたり約三五kg、生鮮魚は一〇kgである。五カ年計画の目標は、一日一人あたり二、一〇〇カロリー、タン白五グラムである。左表は一九六四／六六年のアジア各国の炭水化物、カロリー、タン白質等の摂取量の比較である。

第七表 摂取カロリー量、タン白質および炭水化物食料

一九六四／一九六六

食料構成改善によって栄養価を高めることはインドネシア人全体の体格向上のために必要である。社会的および経済的發展度を示す尺度としての食料構成の改善、高栄養価食料の摂取およびカロリー量摂取の引上げは野菜および食肉生産増大を迅速に計画するための基本目標にされねばならない。こうした観点から稲作政策は、生産、消費および価格だけの側面から検討されるべきでない。全体の体位向上の達成を目標に、現実にもとずいた計画作成がなされねばならない。農業生産計画はすでに各地方でなされており、各地住民の食料構成を示している。ジャワ島では全国の米以外の炭水化物食料の七〇%以上が生産されている。このことは、外領よりもジャワ島において食料構成における米以外の炭水化物食料の占める割合が大きいいことを示している。

ジャワにおける米生産量の割合は全国生産の五五―五六%である。人口の六四%を占めるジャワの食料構成に占める米の比重は、外領の食料構成に米が占める比重の約七五%にすぎない。次表はジャワと外領の生産面からみた食料構成の比較をしたものである。

一九七一年センサスの結果にもとづく人口増加率をもとに考え、もし五年計画の目標が達成されるとするならば、一九七二年の人口一人あたりの、年米生産量は一一三kg (gross) (一九七三年には一一九kg (gross) で、Netでは一一〇kg) になり、これは一人／一日あたり一〇五〇カロリーに換算され、政府の五年計画の自給化目標が達成されることになる。おそらく一九七三年に目標とされる二一〇〇カロリーの摂取は他の食料の補充によって実現されなければならない。しかし米以外の食料によってこの必要が充足されるかどうかは疑問である。

第二表、生産からみた炭水化物食料の消費（Kg／人／年、米を基準とする）

		1961	%	1971	%
I	インドネシア				
	1. 米	85	56	107	67
	2. トーモロコシ	23	44	22	33
	3. いも類	42		31	
	計	150	100	160	100
a	外 領				
	1. 米	102	66	128	74
	2. トーモロコシ	17	34	17	26
	3. いも類	35		27	
	計	154	100	172	100
b	ジャワ				
	1. 米	76	51	95	62
	2. トーモロコシ	27	49	25	38
	3. いも類	46		32	
	計	149	100	152	100

出所、BPS—Produksi Bahan Makan Utama

注、1人あたりのkgは1961、1971年人口センサスを使用して算出

一九七一年の米以外の食料によるカロリー摂取量は一人／日あたり四二五カロリーにすぎなかったからである。

Ⅱ 生産計画における農民と季郎（一九七二、一〇、五）

生産計画は政府によって作成決定される。しかしこれを実行する農民が、稲作に活気づく動機は、家計の必要からであり、その「目標」は高収量と高価格である。

政府の生産計画実施において、すくなくらず行過ぎがみられる。生産目標設定にもとずき、農民へ生産割当がなされるが、ピマス政策実施地域においては、生産のリスクを農民自身が負担するやり方で行なわれる。

稲作を行なう農家戸数は九〇〇万戸であり、そのうち稲作を主とするものは七〇〇万戸に達する。稲作に対する性向および目標は自家需要を満たすだけでなく、市場指向的である。この傾向はとくにジャワおよび南スラウェシで強まっている。稲作地帯での降雨は限られており、雨季は最も生産に適した時期であるが、収穫のリスクは灌漑施設がある場合よりも大である。したがって非灌漑地域の開発のために農民所得の低下を阻止し、都市集中化を制限し、また他の面では新しい生産方法の導入による生産増大の保証をする必要がある。

インドネシアの農業はいまだに伝統的であり、生産力は低い。生産は自然条件と季節的要因に大きく依存している。米やその他の食料生産の発展があっても、その速度は一二年の間に人口増加速度に追いつかれてしまう。天候不順や病害による不作は食糧会計に重大な赤字をもたらす。例えば一九六三年にインドネシア全体で約一〇〇万トンあるいは一一％（ジャワで一四％、外領で七％）の米収の下落がみられたが

この場合には深刻な財政上の問題が生じる。

一九五五年以来の二〇年間に周期的な不作に見舞われた。前回の不作年は一九六七年で、インドネシア全体で三%、(ジャワで四%外領で二%)の対前年収穫減であった。次表は一九五四年以後の収穫を示す。

第三表 米の減収年(一〇〇〇トン・%)

年	外 領			ジャワ			インドネシア		
	生産	減分	%	生産	減分	%	生産	減分	%
1954	3,014			4,817			7,831		
1955	2,921	- 93	3	4,583	- 234	5	7,504	- 327	4
1955	2,921			Tidak ada			Tidak ada		
1956	2,845	- 76	3	Penurunan			Penurunan		
1960	3,711			5,056			8,767		
1961	3,466	- 245	7	4,802	- 254	5	8,268	- 499	6
1962	3,752			5,146			8,898		
1963	3,500	- 252	7	4,443	- 703	14	7,943	- 955	11
1963	Tidak ada			4,443			Tidak ada		
1964	Penurunan			4,375	- 68	2	Penurunan		
1964	4,044			Tidak ada			Tidak ada		
1965	3,902	- 142	4	Penurunan			Penurunan		
1966	4,136			5,203			9,339		
1967	4,072	- 64	2	4,975	- 228	4	9,047	- 292	3

出所: BPS-Produksi Bahan Makan Utama.

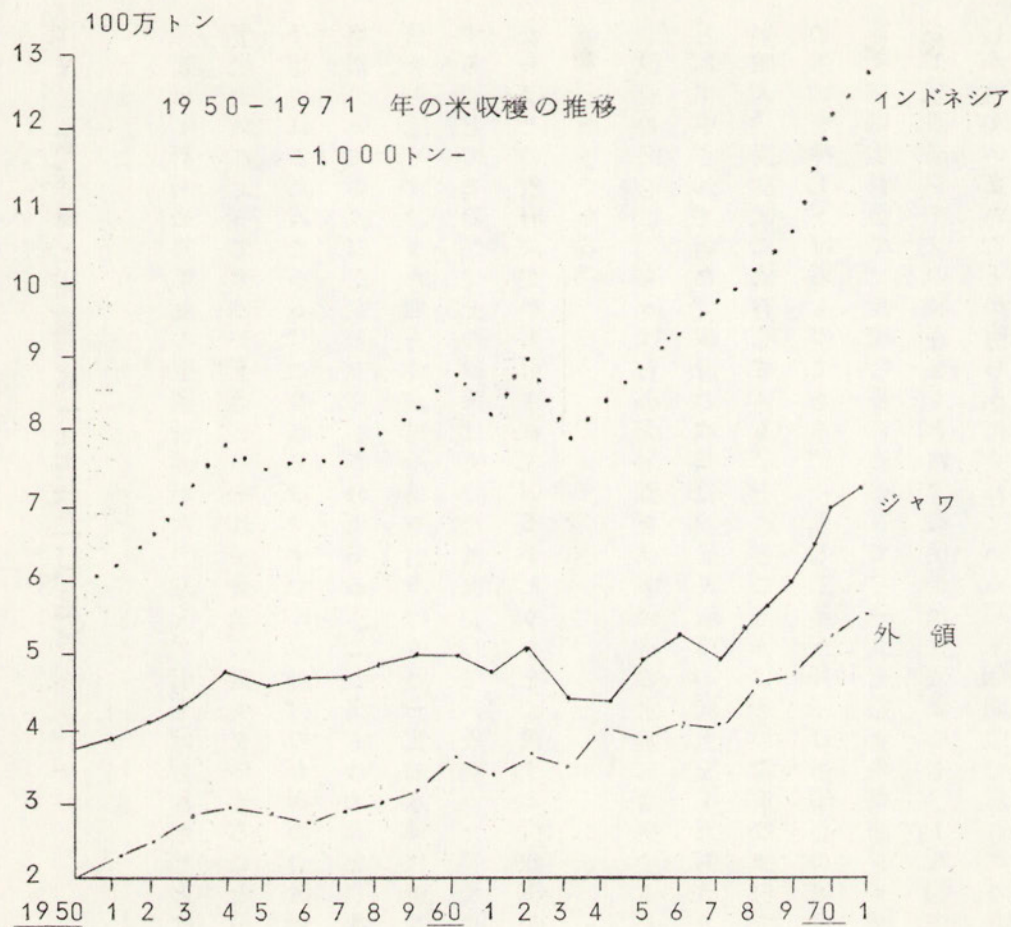
季節生産物のいくつかもまた自然条件で収獲が減少する。

不作による米の供給減は輸入あるいは援助額の増加によって補われなければならない。それは多額の外貨を消費し国家財政支出を増大させ、季節農産物の輸出をも減少させる。ビマスおよびインマスによるインテンシブな稲作プログラムは、実は、稲作分野における政府の干渉および監視を意味する。直接的な監督によって稲作強化地域の生産増が保証され、この増産によって国家目標達成が期待される。

一九七二年度の生産目標を達成するためには、一九七一年度の生産量よりも一一〇万トン多く生産されなければならない。五カ年計画最終年度の目標は一九七二年の目標よりもさらに六〇万トン上回っている。五カ年計画の最後の二年間の目標を達成するために増産強化地域および直接監督地域の拡張と増産促進政策の強化が必要である。増産の可能性は、生産施設の現状あるいは乾季における灌漑設備の状況にかかわっている。生産手段の供給、信用供与、行政機関および強化プログラムを執行する農民の生産意欲は生産目標達成に必要な要素である。

ビマスあるいはインマスによる政府の直接的監督あるいは干渉の可能性を最大面積は、一九七一年で二八〇万ヘクタールであり、全国稲作面積八二〇万ヘクタールの三五％である。このことは全体の六五％が政府の直接監督の外にあることを示す。稲作面積の約三分の二が、ビマスあるいはインマスのような、生産手段を供給されていないのである。こうしたビマスおよびインマス計画の外にある稲作は自然条件および農民自身の力量に大きく依存している。

五年計画の過去三年間は天候に恵まれ一九七一年の六〇万トン増



を最低に年平均約七〇万トンの米の増産があった。残りの二年間の成果は政府の肩に重くかかっている。とくに一九七三年の目標は大きなリスクに直面している。一九七三年は二ノ三年あるいは七ノ九年に一度周期的にやってくる天候不順の年にあたるからだ。前回の天候不順年は一九六七年であった。

左図は一九五〇年から一九七〇年の間の米の収量量の推移を示している。

IV 收穫量と物価 (一九三一年、三)

五カ年計画最終年度の生産目標が六〇万トン引下げられたことは、生産過剰によって米価が下落し、それが農民に損失を与えることが予想されるためである。この修正は、すでに、農村のみの最低価格についての政府決定の中に示されている。この決定は米価を、消費を抑圧せず、また地方で農民所得を引下げない一定の水準に維持することであるが、その政策は実際には機能していなかった。なぜならばその政府決定が実行されているかどうかを監視する行政機関がないからである。

政府の関心は、もっぱら小売米価を標準価格の水準に維持することに集中されていた。政府の政策は、農民所得の向上をもたらし輸入、援助米に依存している。それどころか、その政策は農村での米価を押し下げるものである。一九七二年三月三日の国会の第IVおよびVIII委員会、食糧庁長官によって、一九七〇年の東部ジャワおよび西部ジャワの調査をもとに、農民が消費米価の七〇〜八〇%しか得ていないことが明らかにされている。米価問題で忘れてならないことは、米作がその他の食料や商品のように弾力的に行なわれないことである。低い所得しかない農民の経済的、社会的条件は、季節変動する価格に影響される。社会的、および経済的強制、家計の必要、村落共同体の義務、納税義務などは、収穫と同時に生産物を売ることを強制する。現金による負債返済は延期できないからだ。農業生産の市場問題において市場組織や金融機関をもたない農民は非常に弱い立場に置かれている。

米の収穫は各地域の季節周期に従った決まった月に行なわれる。

	年平均収量の月別割合	収 穫 面 積		月平均の農村での米価 RP/kg	
		%	1000 ha	1970	1971
1月	2.4	2.0	84	51.30	44.49
2月	3.4	3.7	157	49.39	45.76
3月	7.5	8.6	369	44.68	43.84
4月	16.4	14.0	602	38.36	38.93
5月	25.7	22.6	972	38.17	37.85
6月	11.7	17.9	771	38.14	36.82
7月	6.2	6.9	297	39.84	37.81
8月	4.7	5.7	244	41.01	38.16
9月	5.5	6.3	274	42.02	38.89
10月	5.0	5.8	252	41.67	40.23
11月	3.7	3.7	159	42.54	41.41
12月	2.8	2.8	121	43.29	42.11
年平均	100	100	4,302	42.55	40.81

ジャワでは大部分が四月、五月、六月に行なわれる。この三カ月間で収穫の約五五%があげられる。この時期の収穫が大きいので、価格はもっとも下落する。一九五一―六〇年の収穫構造は一九七〇年のそれと大差なく、四月―六月の収穫の年収穫量に占める割合は半分以上である。一月―二月は田植期であり収穫量は少なく、その結果米価は上昇する。米価の季節変動は毎年繰返し農民に損失を与えているが、米政の転換あるいは改革がまだに行なわれていない。

第四表 ジャワにおける稲作面積および米価

第五表 農村での乾籾の価格
ルピア／キンタル

月	西 ジャワ		中 部 ジャワ		東 ジャワ	
	1970	1971	1970	1971	1970	1971
1月	2.742	2.264	2.495	2.061	2.386	1.958
2	2.709	2.298	2.452	2.136	2.356	1.956
3	2.400	2.130	2.046	1.974	2.136	1.933
4	2.014	1.944	1.792	1.792	1.566	1.703
5	1.906	1.718	1.685	1.720	1.566	1.583
6	1.804	1.765	1.661	1.716	1.570	1.615
7	2.042	1.784	1.772	1.764	1.733	1.719
8	1.934	1.828	1.839	1.735	1.949	1.802
9	2.010	1.785	1.900	1.749	1.990	1.849
10 "	2.022	1.867	1.939	1.864	1.989	1.873
11 "	2.160	1.907	1.958	1.930	1.956	1.890
12 "	2.125	1.960	2.002	1.995	2.005	1.932
年平均	2.156	1.938	1.961	1.870	1.929	1.818

出所：BPS-Luas Panen dan Produksi tanm2an rakyat berumur Pendek di Jawa dan Madura.

Indikator Ekonomi

この三カ月の収穫量は農村での米価に影響するばかりでなく、第六表に示されるように都市における米価変動にも影響する。

第六表 ジャカルタ市場での米価推移

月	月別収穫%	品質BIIの白米 Rp/kw	
	1970	1970	1971
1月	2.0	5,180	4,726
2 "	3.7	5,037	4,859
3 "	8.6	4,690	4,463
4 "	14.0	4,277	4,112
5 "	22.6	4,137	3,967
6 "	17.9	4,015	3,867
7 "	6.9	4,415	3,908
8 "	5.7	4,447	3,992
9 "	6.3	4,319	3,993
10 "	5.8	4,308	4,087
11 "	3.7	4,444	4,208
12 "	2.8	4,452	4,210
年平均	100.0	4,475	4,194

出所：BPS-- Indikator Ekonomi.

政府の米政策は、一九七〇年および一九七一年の米価の安定および一九七一年には前年に比べむしろ下落をみたことに成果があった。右の諸表によっても一九七一年の年平均および月ごとの平均米価が前年より下回ったことがわかる。

しかし、米価の下落がみられたのに反して、米以外の食料価格、生活必需品、農産生産手段および農村の合法的あるいは非合法的義務的支出の指数は上昇している。こうした上昇は農民の米の販売価格を引下げてしまい、この数年間に農民の失ったものは少なくない。援助による輸入米の役割は大きい。国家公務員および国営企業社員に対する配給および一般市場への売却は年に約一一〇万トンになる。そのうちの六〇％が援助による輸入米である。一九六九・七一年の国内からの買付は国内の生産量の四％強である。実は、米価の安定を維持するのは一般市場での米売却だけではない。一定の価格を基にして、毎月継続的に公務員などに配給する米が三分の二を占めることは、時に応じて行なわれる放出米よりも有効に、政府の米政策の手段として機能する。

援助米は政府の立場を有利にしている。一九七一年の援助米からの純政府収入は一四四億ルピアであった。しかし反対に、開発に必要なこの収入増加は、米の生産者である農民に損失を与えた。

一九七一年にジャワでは、一九七〇年の生産量より三五万トン多い七二〇万トンの収穫があった。一九七一年の農村での米価は前年平均に比較して一kgあたり一・七五ルピア下落した。この下落によって、一九七一年の農家所得は前年に比較して一二七億ルピアの減収であった。

一九七二年には、アメリカや日本から、約六〇万トン援助米が輸入された。五カ年計画の最終年にはどのくらいの輸入米が必要なのかはまだ不明である。政府の説明では同年に自給が達成される予定で、援助による輸入米は備蓄用に最大限で三五万トンに限られる。

公務員などのために必要な配給米の大半は Bulog (食糧庁)

を通じて買付けられる。すでに収穫期にあるジャワおよび外領の諸地域では、収穫期の収穫量の一〇%までが買付られる。このように B u l o g は消費米価を標準水準に維持するだけでなく、農民の販売価格をも安定させる。収穫季の米価下落は B u l o g の買出動で阻止される。

援助米は政府にとってまだ必要であるがその援助はおそらく財政収入を増大させるだけのものとして評価されるだろう。ここで必要なことは農民の必要とすることと、農民の所得を向上させようとする政府の努力が一致することである。

IV 食糧問題の地方分権化（一九三二—一九三六）

生産、消費、供給あるいは配給の持続性および農民の体位向上などを含み食糧問題は、インドネシア国民全体の、あるいは国家開発計画の一面面として現実的に解決される必要がある。伝統的な方法に代る農業開発の近代化過程は長期的な農業政策の問題である。農業の近代化あるいは開発によってその構造改革がもたらされるにはすくなくとも一世代を要する。

現在までインドネシアには、農業を総体的に開発する農業政策はなかった。よく検討された長期的な農業政策にもとづかない地域開発計画あるいは農村開発計画には限界があり、その方向は、非常に高価な代償を伴う危険がある。

これまでに新農業開発の名目でなされたものは、独立以前からあった農業施設の復興である。この復興政策は、新しい技術の普及および新技術と近代的生産手段の導入によって、生産の量的拡大を得た。

全農業生産あるいは食糧生産は、この一五年間に大きな増産をみた。しかしその増産も人口の増加によって相殺された。近隣諸国と比較すると、インドネシアの農業は第七表にみられるごとく停滞的である。

第七表 農業、食糧生産指数（一九五二／六二年一〇〇）

国名	総生産			1人あたり生産		
	1960	1965	1970	1960	1965	1970
		Produksi Pertanian Seluruhnya				
1. インド	120	122	148	106	96	103
2. ビルマ	119	135	149	107	109	108
3. タイ	130	185	221	109	133	136
4. 西マレーシア	122	151	208	102	108	130
5. フィリピン	124	147	173	104	104	103
6. 日本	118	133	159	112	119	135
7. インドネシア	111	119	136	97	93	94
		Produksi Pangan				
1. インド	120	122	150	107	96	105
2. ビルマ	121	136	149	109	110	108
3. タイ	124	174	212	104	125	131
4. 西マレーシア	135	171	222	113	123	139
5. フィリピン	122	145	173	102	103	103
6. 日本	120	135	164	113	121	139
7. インドネシア	114	121	141	101	95	97

出所：FAO - Monthly Bulletin of Agricultural Economics and Statistics.
No. 7/8 1971

インドネシアの食料で高い増産率を示すのは米で、一九六一年の一人あたり八五kgの生産から一九七一年の一〇七kgに増大した。しかし、とうもろこしは一kg、いも類は五〇kg、大豆／落花生は約六、五kgの減産であった。全体的にみるとインドネシアの農業発展は停滞的であり、急速な生産増大を必要としている。

これまでの食糧農業政策は米の増産と米価を標準価格の水準に維持することを主眼としていた。米政策は、農業開発および地方と農村近代化その他の五カ年計画実施に伴う米の増産のために不可欠である。

五カ年計画で米増産計画に最優先度が与えられたために、地方政府はそれぞれの地域で中央で決定された biomass / インマス制度を導入するとともに、米作拡大を推進した。村および郡の行政段階に至るまで、米の自給達成のために努力を集中した。剰余米の他地域への持出しを禁ずる規制が行なわれたが、すでに得られた増産の結果米政策に否定的側面があらわれた。近接する各地方の間には食糧問題についての協力や調整が行なわれなかった。他の地方でその自然条件に適合して使用されれば一層生産性を発揮したであろう労働力、農業機械、資金貸付などが浪費されたこのことは長期的な米の生産と供給制度が確立されていないことを示す。現在実施されている米政策は、将来の五カ年計画についてのなんの展望も開いていない。

主食である米の維持的供給を確保するためには、生産地がそれほど遠距離でないことと、輸送コストが低いことを必要とする。このために現在の稲作行政の地方分権化の形式を改ため、実際の米の生産性、人口、陸海の輸送力、商業取引関係あるいは経済関係にもとずいて、隣接する州のいくつかの総合が考えられる。

第八表 米の共同市場圏

	人口 1,000人		米生産量 1,000 ton		1人あたり生産 kg/年	
	1961	1971	1961	1971	1961	1971
1. アチエ 北スマトラ 西スマトラ	10,892	14,072	1,344	2,275	123	154
2. 南スマトラ ベンクル ランボン	4,847	2,740	558	776	115	115
3. 南カリマンタン	1,581	2,020	170	221	107	109
4. 西カリマタン 中カリマタン	1,969	2,399	234	345	119	142
5. スラウエシ マルク 東カリマンタ	8,419	10,357	661	1,190	78	115
6. バリ東西ヌサテンガネ ティルーム	5,557	6,617	488	710	88	107
7. 西イリアン	758	923	0.4	1.2	0.5	1.3
8. ジャワ	63,059	76,102	4,802	7,251	76	95
インドネシア	97,085	119,232	8,268	12,769	85	107

出所：BPS - Produksi bahan makanan utama di Indonesia.

Sensus Penduduk 1961 dan 1971.

一つの稲作地域に組込まれた州は、それぞれの市場における生産配分と消費用米の供給あるいは備蓄の保持についての計画に責任を負わなければならない。一市場圏に属する州のすべてがかならずしも自給化を達成しなくても良い。第八表は、以上の米の想定される市場圏の状況を示す。

この表は米の各市場圏内における、その地域内の米の消費を満足させる能力を有することを示している。しかし、西イリアンだけは中央政府からの援助を必要とする。

ジャワにおいて望まれることは、五つの州が各個に人口に見合う生産および供給を行なうことである。問題は、人口増加速度が大きいこと、水田面積が減少していること、人口一人あたりの生産量が小さいこと、大都市と小都市の人口差の大きいこと、季節農産物がかならずしも食料でないことなどである。

一つの米市場圏の生産および供給計画に共同責任を有する行政分権化は、中央政府と州政府との間にあって、その両方の政策に十分連絡がとられることを必要とする。この分権化は米以外の農業生産計画にも応用されるべきである。

将来の五カ年計画の実施段階で必要なことは、農村改革、農業開発、国家開発計画の枠内での地域開発と結びついた食糧問題あるいは稲作問題の展望である。農政の地方分権化はダイナミックな稲作と長期的な消費米供給の安定を一層保証するであろう。



韓 国 の 農 村 を 見 て
—— 食 堂 で は 麦 メ シ 、 高 い 牛 乳 ——

幸 田 岩 助

農 家

川にそって曲がりくねった小さい道をおりる。農家は背山臨水だ。冬の北西風を防ぐ山は赤茶けたハゲ山だが川は清れつ（ ）だ。ため池も多い。大豆をうえた狭い区切りのアゼ道がつづく。一町歩以下で、農家が約七〇%をしめる。LまたはU字型の低いワラビ屋根で、レンガ、粘土、セメントの崩れたカベにニンニクが干してある。石がきにはピンクに咲いたムクゲの花がにおう。白菜などをつけた黒びかりのするキムチの大ガメが五、十個並ぶ。その大小多寡で貧富を示す。

『ムル・チュセヨ』（水をください）と入る。

土間を石粘土で固め床下に煙道をつけ、床にチャンパンジ（油紙）をはったオンドルが目に入る。家具は少ない。子供の机も粗末なものだ。テレビはない。円塔型の物置きのそばには“とうみ”や“ころがし”があり、米、麦、豆を入れたカマスが方々につみあげられている。刈り草をつみかさねた牛小屋から犬がほえつく。『犬をふんでもよろよろと立ちあがり少し歩いていったが、わき腹の骨を波うたせたまま犬はバッターと死んでしまった』——絶糧農家を描いた総監府小作宮の本の一節だ。農工品価格差、耕地の零細性から高利私債にうもれ、上からの農村振興運動にも厭農思想で土地から離脱していく日本軍の『兵たん基地』昭和十八年の朝鮮農村のスケッチを思い出す。

米

高米価政策で昨年より二五%米価を引き上げた。白米八〇kg入り一カマスの政府買い上げ価格が八七五〇ウォン（一ウォン＝〇、八

円)。『腰が伸ばせる』と農民はいう。水原、光州など米どころは一望青々。このあたりはかつて『日本の天皇は日本米を食べぬ』といわせた美味な京畿米、湖南米の産地だ。

戦前日本が、商品売り、企業進出をし、窒米改良と増産で内地へ米を移し朝鮮人には雑穀をあてがい低賃金労働を確保した”米による支配”地帯である。

いま土地生産性は日本の約七〇％。水利不良田が四〇％もあり、四、五十日間雨がなく”焼けた苗”―枯死がおそったところもあると聞く。

新品種『統一』、深耕多肥の採用、交易改善、植え付け拡大、集団栽培など米作促進につとめているが、年七〇―八〇万トンの米穀不足で政府は米消費抑制のため食堂ではポリバブ（爰メシ）を強制し、カレーライスも黒豆入りだった。米が余り転作休耕がふえていた日本の”しあわせ”のしわよせをいまもうけているのだろうか。

農業機械化

暑い日ざしの中、若夫婦が田の草とりをしている。牛馬は少ない。スキ、クワによる家族労働が多くブマシとよばれる労働交換もあるがモスム（作男）による手労働現物支給（五度の食事、マツコリとたばこつき）も高くついてきている。政府は耕運機、病虫害防除機、揚水機、脱穀機など国産化計画をたて、人力を動力にきりかえ（現在、動力耕運機九千台、スキ一〇〇万、動力とろみ八千台、人力二五万）、農漁村経済開発の多角的推進（七二年経済基本政策）を行なう計画だ。春川、水原ですすんでいる。

しかし山がせまり、狭あいだで農道が未整備のうえとび地が多く、購入資金のメドがないため多くの農家は、耕起、整地、碎土、しろがき、水がかり、草とり、虫とり、とり入れを六、七人の家族で行なう。田植え機はなく、井関農機は技術提携中だが、政府は日本からの完成品輸入を禁止している。

リンゴとブドウ

白いサングラツをはき、古いばかりで木箱にリンゴをつめている集荷場。木箱には大邸農協印。夕焼け空をみあげながら青いリンゴをかじる。少し季節が早く、小玉で酸味がつよい。果汁は多くない。

農協では技術改良、無袋栽培、大型共選、市場性を確保しようとして、先につれたように高米価のため、酪農果樹園芸への選別的拡大はない。スモモ、トマトなども農薬が高く腐らん病があるが、価格が上がっており、金になる木をみわたす農民の顔は明るい。花は日本へ輸出しており、農婦は頭に花かごをのせて街へ売りにいく。安養では朝露に光るブドウが美しい。初代朝鮮総監伊藤公ののる列車にはじめての投石があった所だ。

牛乳と豚と唐ガラシ

歩く田んぼのアゼにカエルがとぶ。実に多い。農薬があまり使われていないからだろうか。除草剤などの多薬公害国からくると、川べりの野草を食べる朝鮮牛がたくましくみえる。牛は一三〇万頭。役肉牛が多く乳牛は少ない。ソウル、釜山近郊では米麦からのフスマで飼料は安い。しかし牛乳は高くぜいたく品だ。政府は乳牛畜産振興公社や光州の牛乳基地、肥育農家の育成に力を入れ森永乳業はソウル南部にドライミルク工場をひらく。

黒豚が前庭の小屋に三、四頭。野草をたべた豚は地力を保つたい肥をつくる。化学肥料のつかいすぎで味のおちた日本米をたべる人に『一頭一頭の豚はみな小さな肥料工場である』（毛沢東）ことを思い出させる。しかしバケツから手づかみで散布される肥料は蔚山でみた韓国肥料のものだ。国内向けには安くうり東南アへも輸出しているが、農民には施肥の増大は収益減につながるので消極的だ。

畑には真赤なトウガラシが散らばりサツマイモやエンドウ、カボチャの黄色い花が赤茶けた土にはっている。農家所得向上のため畑

作改善も行なわれてきているが、つい最近もハクサイ二トンが釜山で七〇〇ウォンという大暴落で運賃にもみたら腐らせた。日本と同じく野菜価格安定基金が必要になるだろうか。日本でも畑作物の低収益性―『小麦では出かせぎの二五％、カンショで四六％』（農業白書）をカバーのためビニールハウス園芸、イオン栽培が行なわれているが、韓国でもいい種子を日本から輸入し、日本向けに根菜類をフェリーで輸出しはじめた。大田付近や扶余ではニンジン畑が広がっている。アマ種子は収益性が低く農民がいやがっているそうである。桑畑も増反されかいこもさかんだが、最近では日本の休耕田での養殖鰻（―コイ）のエサ用にサナギを大量輸出している。

（アジア経済研究所）

(資料)

フィジー諸島の発見、探査、その建国までの略史

財団 山田 宗孝

はじめに フィジー国は南太平洋の交通の中心である。地図を眺めれば分るように、このメラネシアの東部を占めるフィジーは、航路については、東はタヒチを経てパナマに、やや北に片よればサモアを経てメキシコに、東北に向へば直接ホノルルへ、西南は直接に、あるいはニューカレドニアを経て、ニュージーランドのオークランドまたはオーストラリアのシドニーに通じ、ニューカレドニアからはニューブリテンを経てホンコンに通じている。首都のスバがすぐれた良港であるからである。また空路については、東はタヒチと、東北へはホノルルと、西南はシドニーと結ばれ、ナディ空港は国際空港となっている。

こうした交通上の中心点となっていることもあって、フィジーは教育や医療についても南太平洋のリーダーの地位にあって、他国の研修生を受け入れている。またこの立地条件を利用し、近年、観光事業にかなり積極的な力を入れている。わが国の報道機関も、その状況取材して紹介している。観光に力を入れているのは、従前からこの国の主産業である糖業が、停滞気味であることも原因である。このため今後の資源開発、経済発展が問題なので、わが国へもその開発について援助の要請がなされていた。この要請にこたえ、去る九月にわが国から予備調査団が派遣され、財団からも一名、これに参加した。

そうしたことで、この国の開発計画については、いずれ発表され

ることと思うので、農業と直接の関係はないが、この群島の発見から建国までの経過を要約してみた。かなり興味が多く、また参考になることも少なくないと思ったからである。なおこの要約は主につぎの二つの出版物によった。

一、フィジー国出版 『Report for the year 1970』

二、R. A. デリイク著 フィジー国出版 『The Fiji Islands』
一九六五年改訂版

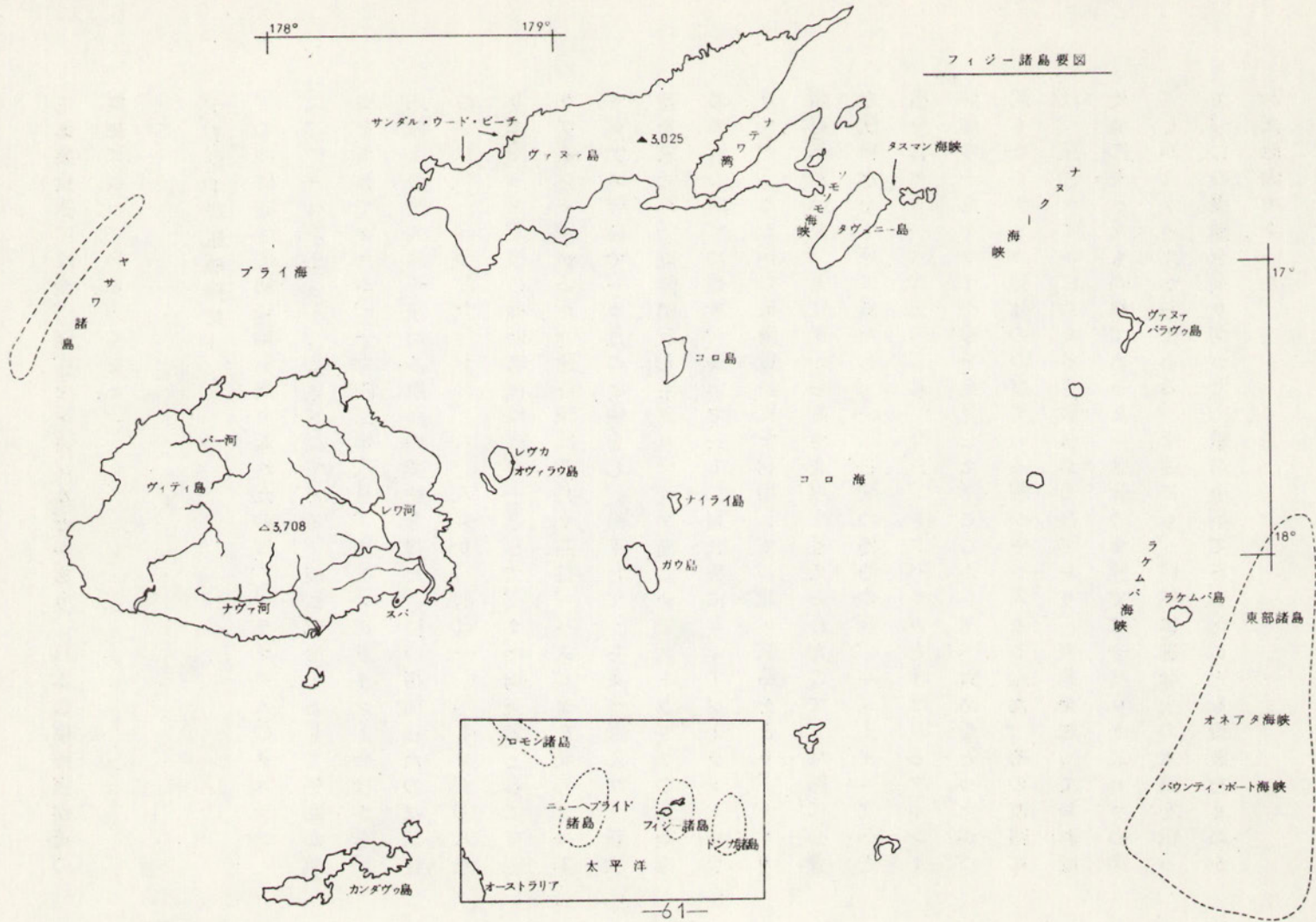
フィジー国のあらまし

フィジー諸島と呼ばれるように、大小約三二〇の島からなっている。しかし人の住んでいるのは約一五〇である。最も大きな島、ヴチレブの面積は一万四千平方キロ、全島をあわせても、わが国の四国を少し上回る面積にすぎない。人口は一九五八年の統計で、三十七万四千余人、その三七、四％はインド人、四二、二％が原住のフィジー人、そのほかに欧州人、その混血、ほかの太平洋の島からの人々、中国人などから構成されている。なぜインド人がこのように大きな割合を占めているかは、後に述べる。

大きな島は上記のヴチレブのほかに、グヌアレブがあるだけで、その他は小さな島にすぎない。大きな二つの島はいずれも中央部は山岳地となっているので、東南から雨をもたらす風は、これにさえぎられる。従って島の東南部と西北部は対照的に、湿潤地域と乾燥地域にわかれている。

フィジーの主産業であるサトウキビは大体乾燥地域で栽培されている。湿潤地域では一部で米作もなされている。そのほか農産物にはコブラ、バナナ、パイナップル、トウモロコシなどがある。

フィジー諸島要図



鉱業資源には金、銅、マンガンなどがあり、日本の事業家がその採掘に当たっている方もある。

フィジー群島の発見

この群島へ最初に船を乗り入れたのは、オランダ人のタスマン (Abel Janszoon Tasman) である。彼は航海士として何回か航海を重ねていたが、一六四二年八月、オランダ東インド会社から、想像上の新大陸を求める航海の契約を得た。彼の指揮したのは二隻の小型船で、一つは六〇トン、六〇人乗り、他は一〇〇トン五〇人乗りであった。彼の補助者には航海士として、また調査者として有能なヴィンセルがいた。遠征隊は八月十四日、バタビヤを発ち、モリシアス群島で一カ月の準備をし、南下してから東へ進んで、新大陸を求めた。期待に反してタスマニア島(オーストラリアの東南端の海域の島)に着き、ついで一―二週間後にニュージーランドを発見した。ここから東南貿易風を利用して、北へ航路をとり、トンガ諸島へ着いた。原住民から好意を以て迎えられたので、帰路に必要な飲料水を十分に満たし、一〇日間の停泊の後、ニューギニアへと出発した。一六四三年二月、今日、ヌクバサガと呼ばれるフィジー群島の一部をなす小島を発見した。ここから南へ針路をとったが、間もなくナヌカ礁脈ののびている腕の中へ入りこんだ。その航路には、三〇マイルにわたって礁脈がのびており、実態を知っておれば死地に入ったも同然であった。礁脈の海側では一ヒロか二ヒロの深さしかなかったからである。幸運にも、偶然に礁脈上の水路を伝って、この浅瀬を乗り切った。船が小型であったことも難破をまぬかれた原因であった。

船はタヴウニ島 (Taveuni)

の東北に達した。ここから透明

な水路がのびていた。これが後のタスマン海峡である。タヴウニ島の峯を深い霧を通して眺めた後、針路を北に反転し、チコチビア島のあたりを通って外洋に出た。ここからソロモン群島をぬけ、ニュージーニアの北端を通り、一六四三年六月、パタビアに投錨した。

フィジーに関係のある第二の探險隊はクック (Captain James

Cook) である。このイギリスの大航海士は一七六八—七一、

一七七二—七五、一七七六—七九と、三回も大航海を重ね、「彼は後継者になすべきことを残さなかった、若し残したとすれば、賞讃だけである」と言われているように、太平洋の島々はもとより、北はベーリング海峡、南は南極近くまで、その航跡を残している。

しかし、フィジーについては、この群島の南方群の一つ、ヴァトアを訪れているにすぎない。彼はその第二回航海の途中、二度トンガ群島を訪れており、その西方のフィジー諸島は避けねばならぬ海域であることの知識を入手していたようである。二回目にトンガを訪れてから、針路を西南にとり、岩礁の迷路を避けてから、ニューブリデス諸島に向った。一七七四年六月の午後おそく、低木に覆われた小島を発見、停泊する。原住民との話し合いもできないまま、これをウミガメ島 (Vatua) と命名し、その位置を確定する。ついで西南方数海里離れた環礁 (Vuata Vatua) を調べ、ニハーヘブリデスへ向った。

ついで登場するのはイギリス人のブライ (Lt. William Bligh) である。彼によってこの群島の大半の島が記録される。彼はクックの第三回目の太平洋探險には、その一雙の船長を勤めていて、トンガ人からフィジー人についての知識を得ていたと思われる。それは

ともかくとして、ブライがフィジー群島を十分に記録し得たのは、皮肉にも部下の反乱によるものであった。これは有名なバウンティ号事件で、一七八九年四月、トンガ水域で、噴煙のあがるトファ島の火山、また近くのカオ島の火山丘の見えるあたりで、船員は暴動を起し、ブライト、彼に味方した一八人の士官と船員は、本船から大型艦載艇に無理に押しこめられた。このランチには覆いはなく、六本のオールで漕ぐものであった。

彼らは一たんタヒチに方向をとったが、逆風で不可能、そこで三、六〇〇マイルも離れたチモール島へ向うことに決心する。トンガの島では、交換物資がないので、食料も手に入らない。火器を奪っていたので、容易に上陸もできない。この間に数名が負傷、一名が死亡する。

トンガのトファ島を離れて二日目の午後、一七八九年五月四日、ブライは南ラウの諸島に達した。最も近くのテーブル状の島が今日のヤンガサ。レヴウであった。この島とモテ島の間の礁脉の東端を進んだが、この水路はバウンティーポート水路と今も呼ばれている。ついで西北に進路をとったが、その日、一〇個の島を記録している。やがて船はコロ海に入り、右舷には大きく浮き上ったコロ島、左舷にもナイライその他の島が視界に入る。マコガイ島の北岸を進むと眼のとどく限り続くサンゴ礁があり、これを越えると、フィジーの第二に大きな島、ヴァヌア・レヴウの険しい峯々が右舷に、やがて最大の島、ヴィティ・レヴウのぎざぎざした山なみが左舷に現われる。この水域は今日、ブライ海と呼ばれている。五月七日の午後、船はヤサワ群島に近付く。その最北端の島のあたりで、二つの大型カヌーが追跡しているのに気付く。風はなぎ、船員たちはオールを

とる、カヌーはなおも追ってくる。幸いスコールが真黒に視界を包んでくれる。スコールが過ぎると、追っているカヌーは一そうになつていた。それも日没頃には、あきらめて陸地の方へ帰って行つた。こうした小船による困難な航海にもかかわらず、彼らのこさえたブライ諸島の地図は、今日でもほぼ正確であつたとされており、フィジー諸島の概ぼうが示されている。

こうした経験と成果は、二年後にブライを再びフィジーに就航させた。今度の任務は、タヒチでバンの木の苗を集め、西インド植民地に配布することであつた。この航海を利用して彼は再びフィジーに向つた。前回はモテ島の南を通つたが、今回はその北を通り、オネアタ海峡を、前回の航路と平行して進み、ヴァヌア・ヴァヌアの北端を過ぎて、針路を北に向けた。やがて右舷にヴァツウ・ヴァラとヤサタの両島を眺め、タスマンの発見と結び付け得たのに満足し、南に転じ、ついで西に向い、ガウ島とナイライ島の間を通り、この航路にあるサンゴ礁の位置を確かめた。その後ヴィティ・レヴウの東南にある岬を記録し、カンダヴウ島の西側を回り、この群島から離れた。

この航海によつて、第一回目の発見を確かめるとともに、新しい発見をつけ加え、フィジー群島についての彼の地位を最も重要なものにした。

一八世紀も終りに近付いて、伝道船ダフ号によつて、ウィルソン (Captain James Wilson) は東部群島で、幾つかの新しい発見をしている。彼の前歴は波らんに富んでいるから、極く簡単だが、紹介しておきたい。一七八〇年、イギリスはインドのマイソールと第二次戦争に入っていた。フランスはマイソールを助けていた。こ

の時、ウイルソンはイギリス軍に物資を補給のため、南インドの沿岸にいた。この船はフランス側に捕され、彼とその船員は捕りよとして、マイソール側に渡された。脱走したものの、間もなく捕えられ、一兵士の扱いで、鎖にしばられ、裸身、裸足で五〇〇マイルの道を歩かせられて、牢獄に入れられる。それも三二ポンドの重しをつけられて。この牢獄にほとんど餓死状態で二カ月生き長らえ、ようやくイギリス軍に救出される。何年かインドで過し、イギリスへ帰って隠退しようと思う。帰国の船中で、一人の宣教師と知り合い、宗教について議論を重ねる。その結果、無宗教主義をすて、キリスト教の信仰に入る。未開の南洋の島々への伝道計画のあるのを知って、その航海の指揮に当ることを申出る。

かくて彼のダフ号は、一七九六年九月、二人の船員と、宣教師とその家族からなる三二人を乗せてポートマスを出帆する。太西洋を南下し南米のリオ・デ・ジャネロに着き、更に南下してから、大きく迂回して東方への航路をとる。タヒチに着いたのは、翌年四月であった。ここで一八人の宣教師の一隊を上陸させ、ついで、トンガタブ、マーケサスに宣教師を下し、再びタヒチに帰る。

九月に入って、帰国の航海となるが、中国へ寄って茶を積みこまねばならない。従って針路は西北になる。一七九七年九月八日、ヤガサ・レヴウのあたりに達する。島の形からブライ船長の最初に見た島だと分る。その夜は一晚中、疾風が吹き、海はほえていたが、朝になると船は危険なサンゴ礁に取り巻かれていることが分る。疾風はさらに強まって来たので、上手回しで苦心を重ね、翌日の朝までに礁域を脱して、もとの地点に戻る。

今度はこの大きな礁域の北を迂回して進み、キボボ島、ミドルト

ン島などを発見する。ナイタンバ島に近付くと、住民は槍を手にして浜辺にいた。西北西に進んで、ラウカラとガメアの二島に近付いたが、ここでも住民は浜辺に群り、林にはノロシらしい煙が見える。これらの島は一五四年前にタスマンの発見したものである。タスマンの航路の終点を越えて進むとビットマン・サンゴ礁にはまる。船長と船員の機敏な行動で離脱し、浸水もしなかったため、航海を続ける。間もなく西北にチコピア島が見え、岩礁地域を乗り切ったことになる。船はフィジー諸島を後にして中国へ向う。中国から五カ月余りを費し、一七九八年六月、チームズ河畔に投錨する。なおダフ号は第二回の航海に乗り出したが、フランス側に逮捕され、伝道団はイギリスに送還、船は没収されてしまった。

追記すると、ウイルソンは無計画にフィジーを通る航路を選んだ故ではなく、ブライ船長の談話集を読み、その地図を手にし、完全装備の船で、未知のサンゴ礁を乗り切ろうと試みたのである。またこれらの島の住民について知ろうとしてもいた。そうした点は成功しなかったが、彼は主にサンゴ礁と比較的小さな島を沢山発見し、数の上では比重が高く、またこの時代の地図の空間を埋めた故である。

十九世紀に入るとともに、発見の時代は終り、海洋測量家と探險家の時代となるが、この両時代を結ぶかのように、発見と探査が加えられている。それは当時のロシアの南極探險船によるもので、指揮者はベーリングハウゼン (Fabian von Bellingshausen) であった。

一八二〇年八月、改装のため北上した彼の船は、南緯二一度を越えたあたりで二つの小島を発見した。今日のツヴァナ・ラとツヴァ

ナ・ソロである。さらにその北方でオノ島の一群を発見している。この船へは、フィジー人がカヌーで何回か訪れたことから、当時としてはくわしくフィジー人について伝え、また乗組みの画家が彼らを色彩で描いており、言語学者は多くの言語を集めてロシア語と比較している。

探査と海洋測量

探査は一九世紀の頭初一〇年間になされたビャクダンの取引に始まる。一八〇五年頃といわれているが、ある船長がトンガで、フィジーにはビャクダンの材が得られると聞いて、サンゴ礁の間を手で探るように船を西北へと進め、ヴァヌア・レヴウの西端のブア湾にたどりつき、ビャクダン材を入手した。間もなくこの発見は知れ渡り、この有利な取引に多くの船が殺到し、一〇年たぬうちにビャクダンは伐りつくされ、サンダル・ウッド・ビーチの名前だけが残されることになった。

ビャクダンを求める船は、ヴァヌアばかりでなく、ヴィティへも行ったことはもちろんである。当時のフィジー人は訪問者に敵意を持っていて、油断できなかったので、船は備砲の射程の所で止まり、必要以外は上陸しないで取引の交渉に当たるとされている。

交渉の仲介に当たったのは、以前にやって来た船からおきざりにされた船員、後に波止場ゴロと呼ばれた人たちであった。この港ゴロの一人のロケルビイは、ビャクダンを求めて、一八〇九年にヴァヌア島の北岸を探査している。彼の日誌は一九二五年になってロンドンで出版されているという。

ビャクダンが伐りつくされてからの二〇年間は、時折捕鯨船やア

メリカのナマコ取りの船が訪れるだけであつた。この間に、ビヤクダン商人たちなどから集められた知識をもとアロースミスが当時この地域の唯一の地図を一八一四年にロンドンで出版している。ヴァヌア島のブア湾沿岸はその水深とともに、かなり正確に示されているという。ついで一八二六年一月には、イギリスのクロッセル (Crozier) 船長によつて、ヴィティ島の南岸やモアラ群島などが探査され、製図されている。

欧州人で最初にヴァヌア島内へ足を踏み入れたのは若い水夫のヂャクソンであつた。彼は一八四〇年の末、乗っていたスペインの海賊船が、ソモソモ海峡にさしかかった時、泳いで脱走し、ソモソモ島の酋長に救われる。翌年ラムビ島からヴァヌア島の東北端のウドウ岬へ、またソモソモ海峡からヴァヌア島東南の半島部を横断、さらにナテワ湾を渡つて、内陸部の村々で何カ月か過し、この間ヴァヌア島の北部と東部の入江の大部分を調べ、ソモソモへ帰っている。こうして彼はフィジー人の村で一〇年を過した時点で、一八五〇年イギリスの軍艦に助けられる。後にそのフィジーでの生活を書き残すことになる。

最大の島、ヴィティについては、ウルヴィユ (Dumont d'Urville) の二回の探險がある。第一回は一八二六年四月にイギリスを出発し、フィジーでは、東南の広い海域からこの群島へ入り、コロ海を回り、南に転じてトトヤとマツクの両島を見て西に転じ、ヴィティ島の東南端に近付き、再び南に下ると、カンダヴウ群島から北に張り出している大サンゴ礁に乗り上げそうになる。カンダヴウを迂回し、ヴァツレン島を通り、ヴィティ島の西南端を確かめて、この群島から離れている。

第二回は一八三八年のことで、この時も小型快速艇を使っている。今度の目的は、四年前にフィジー人がフランス船を捕え、船長以下船員の大半を殺害したことに對する処罰のためであった。東からラケムバ島に着き、水先案内を雇って、コロ海を無事に通過し、ヴィティ島の東南部の村について調査、ヴィワ (Viva) の酋長たちに罪のあることが判明、その部落を破かいした。

ついで一八三八年八月、イギリスのコーンウェイ号の一雙のボートはレワ河の支流を探索、またその翌年二人の宣教師は四〇マイル上流の地点にまで達している。

ヴィティ島ばかりでなく、この多島海についての大がかりの探索が、一八四〇年に三カ月にわたってなされた。この探險隊はスループ型砲艦二隻、二本マストの帆船一隻、付属船一隻からなり、司令官はウィルクス (Charles Wilkes) 海兵のほかに測量士、地理学者、動物学者、植物学者、言語学者、画家などが乗船していた。

一八四〇年五月、ヴァトア海峡を通じてこの群島に入り、当時の貿易の中心地レヅカ島で水先案内を雇い、各島を回航、要所には氣象觀測所が設けられた。かくて主だった島の沿岸はすべて実地に測量された。この地図は長らく標準図となったが、内陸部についてはほとんど白紙にとどめた。ただ例外はヴィティ島の東南部で、一雙のボートによって、レワ河の主流が河口から数十マイルの地点まで探索された。

ついで一八五五年から五六年にかけ、デンハム (Denham) を船長とするイギリスの測量船が、ウィルクスの地図にもれたものも加えて訂正し、海軍省地図を完成した。また乗り組んでいた軍医助手のマクドーナード (Dr. J. D. Macdonald) は植物学者や各地の

酋長などをつれ、レワ河をさかのぼり、最も大きな支流の源をつきとめ、ナモン峡谷を探索、再び主流にもどり、これを一〇マイルさかのぼったが、この地点で敵意を含んだ原住民の人たちに追い帰される。そこで河口近くで合流している別の支流をのぼり、カヌーでも進めぬ地点まで探索した。

一八六〇年代になると、ヴィティ島では沿海の要所に、欧州人の植民地ができた。しかし、内陸部については未だ十分に分つていない。

一八六五年八月、フィジーとトンガの領事であつたジョンス（Captain H. M. Jones）の一隊が、この島を横断し、内陸部の事情を明らかにした。そのコースはカヌーでレヴカ島をたち、ヴィティ島南端のナヴァに着き、ナヴァ河をさかのぼり、この島の分水嶺を越え、北峯のタヴァに至るものであつた。

この探險を成功させた裏には、波止場ゴロの一人であつたタンフオードの案内が役立っている。彼はイギリスの船員で、トンガからヴィティ島に渡り、奥地に生活していた人で、この探險後も、この島に止つて五二年間を過している。奥地の状況はというと、この頃は未だ人喰いの慣習が生々しく残つていて、村々の草地の樹々には人間の頭蓋骨、骨盤、大腿部が飾られていた。村人を驚かすと共によろこばせるため、花火、爆竹、ノロシなどが使われた。

ヴィティ島のさらに詳しい知識は、一八七三年から七四年の軍事行動の副産物として得られた。これはバー河で二人の移民が殺害されたことに対する行動で、これによつて今まで欧州人のほとんど入つたことのなかつた北部台地の広い地域が判明した。

一八七四年、この島々がイギリスへ譲渡後も、ヴィティ島内で未

知のままであったシガトカ河の峡谷が、原住民の反乱鎮圧を機に探查され、探險時代は終る。

フィジーの略史

フィジーの東方にあるトンガ諸島では、少なくとも一〇世紀には王権らしいものが成立していたと言われる。しかしフィジーでは各地域が酋長制によって独立し、その間に抗争が繰り返えされていたようである。こうした状態に変動をもたらしたのは、ビアクダン取引の船であった。この商売は一〇年とは続かなかったが、この間に脱走者や難破船の船員などが波止場ゴロとして現地に止ったほか、難破船から引揚げられた火器が、部族間の争いに使われ、驚くほどの効果をあげた。一時この火器と使手の白人は、バウ (Mbau) ヴィティ島東南端) の酋長が独占し、その地位を支配的なものにたかめた。こうしたことから、次第に連合国家、あるいは王国らしいものが、風上に当る沿海地方で形成される。

火器の導入とともに、新しい病氣とラム酒が次第に島民を犯した点も注意されてよい。

ビアクダン・ブームが過ぎると、普通の商人や伝道師がやって来た。商人の多くはヴィティ島の東方海上にあるレヴカ島を拠点とし、小さな縦帆式帆船で各島との取引を進めた。一八三五年にメソジスト派の伝道師たちが東部群島のラケムバ島へやって来た。彼らはトンガでフィジー語を習っていたので、原住民の人たちに英語の読み方を教えた。しかし一〇年余りの間は、ほとんどキリスト教に改宗する者はなかった。有力な酋長の何人かが改宗させられてから、急速にキリスト教が普及した。

一八四四年にはフランスから伝道団が来たが、政治上の疑いからメソジストのような成果はあげられなかった。

つぎにやって来たナマコ取りや捕鯨船の人たちが、理由は別として、原地側から攻撃されたことで、フランス、アメリカ、イギリスの軍艦により、取調べと共に報復が加えられた。

一八五〇年代になると、部族間の抗争は頂点に達した。当時この群島内で最も有力であった酋長カコバウ (Cakobou) が、戦いに敗れたのを転機にキリスト教に改宗したこと、また続いてトンガ国の援軍によって、最強の相手方レワを破ったことで情勢は一変、カコバウは西フィジーの最高酋長となる。こうした過程で西フィジーでは改宗者が増え、やがて積年の悪習と残忍性が姿をひそめてゆく。

一八五八年九月、イギリス領事がオバラウ島のレヴカに着任する。時を同じくしてアメリカの軍艦がやって来て、三年前に約束された、アメリカ人に対する暴行の賠償費を要求する。困惑した大酋長は、自分の統治地域の一部二〇万エーカーを割譲する条件で、アメリカ側の要求する約九千ポンドの支払をイギリス側に求めた。領事はこの申出を本国へ伝えるため帰国する。一年後に帰任するとトンガ側の侵略によって島内は混乱している。ようやくこれを終息させたが、本国から派遣された審査官は、割譲申入れに対し否定的な結論を出す。その結果、一八六二年にフィジー側の申出は謝絶され、ついで領事は召還される。

間もなくオーストラリアから続々と移民が渡ってくる。少数の人たちは実情に驚いて帰国するが、多くは島内に止り、棉栽培の農園か羊の牧場を開設しようとする。いづれにしても必要なのは土地と労力であるが、政府らしいものもないので、この植民者たちは困

難におちいる。一八六五年に連邦国家をつくる動きもあったが実を結ばない。しかし何らかの形で政府を設ける必要性は、年とともに痛切になってくる。

この機運に、一八六七年、マアフリー (Ma'afree) は北フィジーと東フィジーの連邦結成に成功する。これに対しカコバウは野心的な規模でバウ王国を設立する。しかしバウ王国も、白人の大臣の離脱とともに、架空に近いものとなる。

一八六一年、アメリカで南北戦争が始まると共に、綿花相場は暴騰し、これはフィジーにも波及して、綿花の輸出は急増する。これに伴い開拓者が増え、労力需要の増大に対し、ニューヘブライド諸島やソロモン群島から労働者が投入される。殺到した開拓者の中には、犯罪者が少なくなかったし、労働者の導入には悪徳な行為も伴っていた。一方開拓者には土地保有権の保証もなく、通貨はとほしく、銀行や信用制度もなかった。それにも増して生命や財産の安全に対し、何の拠り所もなかった。政府の必要性は益々たかまってきた。

この情勢に対し、一八七一年六月、少数の人たちによってレブカに行政機関が樹立されたが、これも白人側からは反感をまねき、フィジー側は消極的であった。しかも開拓者の中には、綿花の暴落から無一文になり、その結果、武装して反抗するものも出た。この政府は二年近くの間、一二万四千ポンドを支出しているが、この額は収入の三倍という有様で、国庫は破産寸前に追いこまれた。

貿易はほとんどなくなり、法治上でも危機のたかまった一八七三年の末、イギリスから二名の高等弁務官が割譲申出に答えるために来島した。この頃は各酋長たちも、イギリスの援助を積極的に要請

していた。かくて一八七四年一〇月一〇日、相互の信頼と好意にもとづき、条件なしの割譲書が作成され、大英帝国の占有地であり、属領であることが宣言された。

一八七五年六月、ゴルドン (Arthur Gordon) が総督として着任した当時、フィジーでは麻疹が流行、人口の三分の一は感染、人々は意気阻喪しており、しかも山地部族は不隠の構えであり、一般商業の景気も悪く、財政は赤字で、しかも救済金一〇万ポンドを本国から借りている状態であった。

ゴルドン卿はフィジー人の信頼を回復することから着手した。その根本理念として、フィジーはフィジー人のもので、このために正当な地位を確保してやることであつた。こうした観点から原住民への課税にも新しい方式をとつた。この政策は開拓者や商人側から反對されたが、貫き通された。かくて各地にイギリスに忠実な酋長たちが生れることになった。

一八八〇年代の初めは、棉からサトウキビへの切り変えもはかばかしくなく、開拓者にとって、不景気と不満の時期であつた。オーストラリヤかニュージーランドとの合併が企てられたのもこの頃のことである。しかしこの時期の末期に、比較的大型の精糖工場が操業開始の運びとなり、また労力需要に対しインドから役務契約による労働者が招かれて、事態は好転した。一八八六年から八八年の砂糖相場暴落の後にもかかわらず、砂糖の輸出は、一八九〇年一五、二九一トン、一九〇〇年には倍増し、価格も三九万余ポンドに達した。一方、コブラやバナナの輸出も急増し、政府への反対運動も収まった。

二十世紀に入ると、外来者の間から立法議会へ代表選出の要求が

起った。これは一九〇四年になつて欧州系の人たちには認められた。経済状態の好転により、その他の改革もなされ、原住民への課税も軽減され、酋長たちの息子のため学校も建てられた。厄介なのはインド人に対する処置であつた。その生活改善に施策もなされていたものの、役務契約には驚くような弊害が伴っていた。これについてインド政府は、一九一七年に協約を廃棄してきた。またフィジー国内でも一九二〇年一月から満期となつていない者に対しても契約は破棄された。物価の高騰で不隠な状態を示していたインド人も、これらの措置によつて、自由な甘蔗栽培家または普通農家として定着できることになった。すなわち甘蔗農園はインド人労働者のために、小さな保有地に分割されたのである。もちろん全般的に農地の不足を訴えてはいるが、こうした地位の改善で、その後新しい移民を迎えていないのに、人口は増加し、総人口では最も大きな割合を占めるに至っている。また一九二九年からは立法議会へ代表を選出するのが認められ、さらに八年後にはフィジー人や欧州人と同数の代表を選出できることになった。

フィジー人については、近代化の洗礼で、やがて彼らの伝統的社會構造は破壊されると思われたが、予想に反し今も堅持されている。これは経済上は一九四〇年の原住民土地信託法によつて、総てのフィジー人の土地は、その所有者に代つて管理し、その利益を守るために土地信託局ができたことにもよる。また一九四五年の業務法により、フィジー人は自分たちの事件は自分たちで処理する責任者となり、これに伴つて各ブローグインスは地方行政の一単位となり、それぞれ議會、法廷、財務官および行政官をもつことになった。また協同組合運動がすばらしい勢で発展し、その伝統的生活方法の特徴

を守ると共に、新しい経済上の役割を果たしている。

開拓者としてこの国の経済発展に寄与した欧州人は、次第に農園から離れ、都会や産業中心地へと集まっている。一般産業の発展のほかに鉱業が主要な位置を占めてきたことによるものである。タヴァ鉱床は、この時代の有数の発見であった。また第二次産業も主に欧州人によって育成された。

近年、この国では観光事業が発展し、相当の収入源となるまでに至っている。とも角、経済の発展は、歳入増となり、これによって公共事業、教育、衛生また医療施設の拡充も可能となった。これらの分野の中には、西南太平洋の中心となり、他国から学生や患者を受け入れている現状である。

このように成長したフィジーに対し、一九七〇年一月一日、イギリスは九六年間の統治の後、その独立を認め、ここにフィジー国はイギリス連邦の一員としての独立国家となった。

海外農業に対する協力事業ならびに

開発事業に従事したい方

海外農業に対する協力事業ならびに

開発事業に必要な人材を求めている方

は本財団へご連絡ください。

海外農業開発財団は左の事業を行なっています。

○海外農業技術者となることを希望する方の登録とプール

○新人からの海外農業技術者への養成

○待機中における技術のブラッシュアップに必要な研修費の貸付

○海外農業の協力および開発事業をしている団体企業等へ優秀な

農業技術者のあっせん。

○海外農業調査団の編成、送出

○海外農業情報のしゅう集、紹介

海外農業ニュース

昭和四十七年十一月二十日 通巻第三十六号

編集兼発行人 石 黒 光 三

発行所

財団法人 海外農業開発財団
郵便番号 一〇七

東京都港区赤坂八一〇―三三
アジア会館内

電話 直通(四〇二)一五八八
(四〇二)六一一一

印刷所 泰 西 舎

